

# 写真新世紀

## Grand Prize

Maya Akashika

## Excellence Awards

Yoshiyuki Okuyama

Masanori Kito

Patrick Tsai

Mariko Yamada

## Portfolio

Grand Prize 2010

Karen Sato

Grand Prize 1994

Seiji Kumagai

Vol.26 / 2011年度 (第34回公募) / WINNERS

# 写真新世紀

New Cosmos of Photography 2011 vol.26

## CONTENTS

- 02 はじめに
- 03 審査員プロフィール
- 04 優秀賞選出審査会総評
- 2011年度(第34回)
- 06 グランプリ選出公開審査会報告
  
- 08 グランプリ  
赤鹿 麻耶
  
- 優秀賞
- 16 奥山 由之
- 22 木藤 公紀
- 28 パトリック・ツァイ
- 34 山田 真梨子
  
- 40 佳作
  
- 1994年度年間グランプリ
- 50 熊谷 聖司
  
- 2010年度グランプリ
- 54 佐藤 華連
  
- Talk Session about Examination
- 58 審査員座談会
  
- 59 写真新世紀東京展2011開催報告
- 60 写真新世紀の歩み

写真で何ができるだろう？  
写真でしかできないことは何だろう？

[canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)

# はじめに

写真で何ができるだろう？

写真でしかできないことは何だろう？

## 写真新世紀とは

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的に1991年にスタートしたキヤノンの文化支援プロジェクトです。

公募形式のコンテストによる新人写真家の発掘に始まり、受賞作品展の開催や受賞作品集の制作、ウェブサイトでの情報発信など、受賞者の育成・支援活動を総合的に行なっています。

作品サイズ、形式、点数、年齢、国籍など、応募制限のないこのコンテストは、銀塩・デジタル写真を問わず、自由で独創的な写真表現を応援しています。

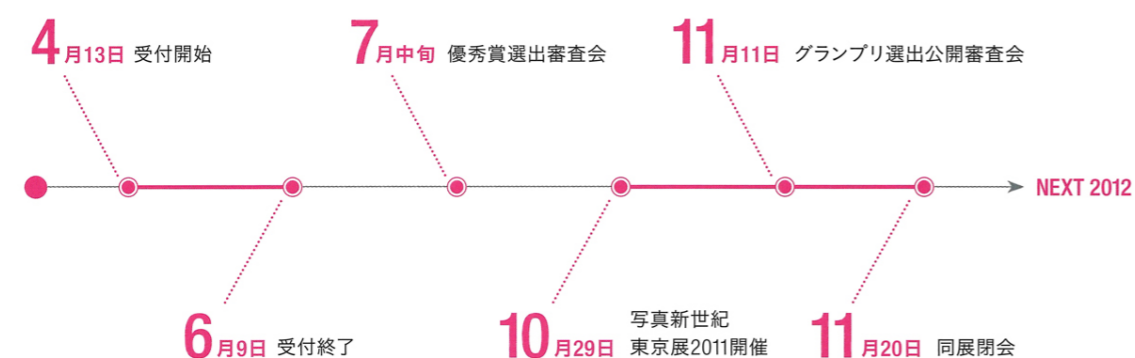
これまでの21年間、2011年度の審査員である大森克己氏や佐内正史氏、HIROMIX氏を始めとして、蜷川実花氏、オノデラユキ氏や澤田知子氏など、国内外で幅広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。

次代の写真表現を切り拓く写真家を輩出するために、今後も写真新世紀は歩み続けます。

## 写真新世紀2011

34回目となる2011年度の公募では、3月に、5名の審査員と応募要項の発表があり、4月中旬から6月中旬まで応募を受け付けました。総数1,305名の応募を受け、7月にキヤノン株式会社下丸子本社で行われた「優秀賞選出審査会」において、審査員による厳正な審査のもと、審査員ごとに優秀賞および佳作を選出いたしました。

11月には写真新世紀東京展2011が開催され、その会期中に行なわれた「グランプリ選出公開審査会」において、優秀賞受賞者5名の中からグランプリ受賞者が決定しました。



## 審査員プロフィール

2011年度 (第34回公募)

審査員：大森 克己、佐内 正史、榎木 野衣、清水 穰、HIROMIX

### 大森 克己 おおもり かつみ

写真家。1963年生まれ。兵庫県出身。日本大学芸術学部写真学科中退。フランスのロックバンド「Mano Negra」のラテンアメリカツアーと自身の旅の軌跡を一冊にまとめたポートフォリオ「GOOD TRIPS, BAD TRIPS」が、1994年度(第9回公募)写真新世紀において2人の審査員、ロバート・フランク氏、飯沢耕太郎氏に選ばれ優秀賞を受賞。以後、写真集、展覧会、スライドショーで作品を発表し続けている。主な写真集に「サルサ・ガムテープ」(1998年リトルモア)、「encounter」(2005年 マッチアンドカンパニー)、「サナヨラ」(2006年 愛育社)、「Incarnation」(2009年 マッチアンドカンパニー)など。

### 佐内 正史 さない まさふみ

写真家。1995年度(第12回公募)写真新世紀優秀賞受賞。常に写真の時代をリードし続け、出版した写真集は多数。2002年写真集「MAP」で第28回 木村伊兵衛写真賞受賞。2008年に写真集レーベル“対照”を立ち上げ、2009年12月にその第9弾写真集として「Custom Chair Album」を発売するなど精力的に活動中。

### 榎木 野衣 さわらぎ のい

美術評論家。1991年に刊行した最初の評論集「シミュレーションイズム」が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また著書「日本・現代・美術」では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみせた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた「戦争と万博」など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。

### 清水 穰 しみず むのる

写真評論家。1995年頃より現代美術・写真、現代音楽を中心に批評活動を展開している。1995年「不可視性としての写真：ジェイムズ・ウェリング」で第1回重森弘淹写真評論賞受賞。主な訳書に「ゲルハルト・リヒター写真論／絵画論」(1996年 淡交社)「シュトックハウゼン音楽論集」(1999年 現代思潮新社)。著書に「白と黒で、写真と・・・」(2004年)、「写真と日々」(2006年)「日々は写真」(2009年、以上、現代思潮新社)などがある。現在、同志社大学言語文化教育研究センター教授。

### HIROMIX ヒロミックス

写真家。高校卒業後に応募した「SEVENTEEN GIRL DAYS」で写真新世紀1995年度年間グランプリを受賞。写真集「GIRLS BLUE」(1996)は写真界異例の部数を売上げ、ガリーフォトブームの先駆けとして、その後の写真表現の在り方に大きな影響を及ぼす。2001年写真集「HIROMIX WORKS」で第26回 木村伊兵衛写真賞受賞。個展「早春、心の輝き」(2009年、hiromiyoshiiギャラリー)他多数。

2011年度(第34回公募)写真新世紀

## 優秀賞選出審査会総評

7月中旬、キヤノン株式会社下丸子本社にて、  
2011年度写真新世紀の優秀賞選出審査会が行なわれました。  
今年は1,305名の方からのご応募があり、  
厳正なる審査を経て、優秀賞5名、佳作20名が決定しました。

### 大森 克己 評

「全体に愛情が足りない」

気になったのは、写真の数が多すぎるポートフォリオが多いということ。ただいたずらに分厚くて一枚一枚には力がない、というパターンがよく見受けられます。それから、単純にいろんなものを見たい。それはモチーフにも、方法論にも、コンセプトにも言えます。「こんな見たことないな」って感じる作品が減っています。全体に愛情がたりない。写真に対する愛情がもっとあっていいと思う。それには他人の作品をもっと見るとか、歴史を知るといことも含まれるし、技術的な可能性を追求することでもある。全体的に、軽くなっている気がします。“薄い”と言ってもいいかもしれません。作品に残っていくものって、めちゃめちゃ楽しいとか気持ちいいとか、すごく辛い目にあったことなど、そういう体験の中から生まれるものだと思うんです。写っているもの自体が見慣れたものであったとしても。その感じがないな、と思いました。でも、過渡期なのかもしれません。戦争が起こっていたり、大地震があって放射能の問題を抱えている場所もある。そういう中で鈍感ではいられないはず。そういうことがそのままモチーフになるということではなくて、そのなかで写真の役割、何が出来るか考えながら、写真を拡張していった欲しいと思います。

### 佐内 正史 評

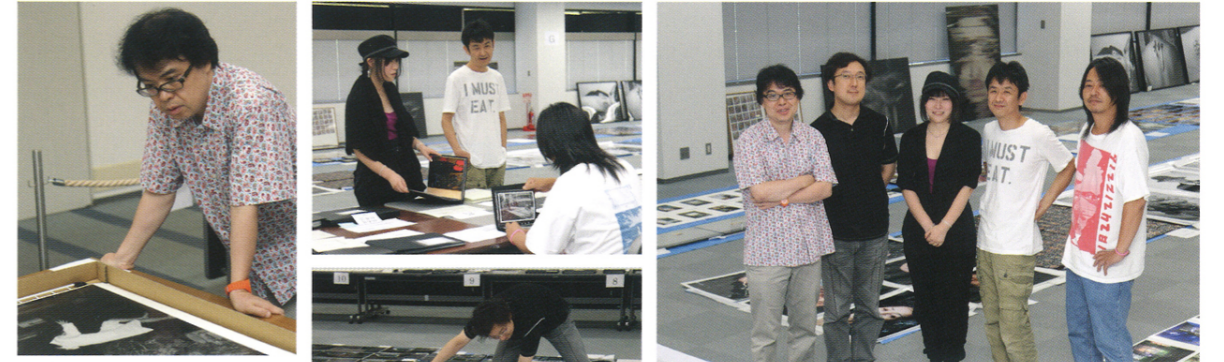
「本当は10枚で終わってもいいんだけど」

ブックの人はさ、束ださなきゃなんないし、束出す為に点数増やさなきゃなんないじゃん。俺も最近、昔からかな、10枚で終わっちゃうんだけど、でもそれじゃあなって増やして。本当は10枚で終わってもいいんだけど、人とのつきあいもふえてっちゃったんで。写真新世紀だす人はつきあいはまだ考えなくていい。サービスは写真で稼ぐようになってからでいい。あと写真で自分の気持ちとか考えを言いたい人が多い。それは写真とは違う。並びでもそうなっちゃってる。

### 榎木 野衣 評

「写真であることを越えているかどうか」

傾向としては、昨年に引き続き、“さりげない日常の中に神秘的な瞬間が宿っている”というような着想で撮られているものが多いと感じました。それは変哲もない風景や、愛しい恋人の姿や、季節が移り変わる瞬間などで、そこには写真でしかとらえられない煌きがあるというような作品ですね。  
でも僕は、それはある意味当たり前だと思うのです。写真に撮らなくても、どんなものでも良くも悪くもすべて、何かしらの存在感というのはあるわけで、そのくらのことならわざわざ選ぶまでもないな、とってしまいます。  
ですから、そこから出発しつつも、そういう次元を突き抜けたものにアンテナを向けるようにしています。煌きの先にあるもの、それは、そこになにかが「在る」ということでもいいし、失われた「時」としかいいようのないものでもいいし、撮った本人さえ、まだ気づいていない「無意識」のようなものでもいいのです。とにかく、日常から突き抜けたところで世界が創られているということが写真から滲み出てくるようなものには、つい、こちらもアンテナがピツと反応してしまう、そういう選び方をしています。僕は写真家でも写真評論家でもないの、基本的に写真としてどうかという見方はしていません。写真ではあっても、写真であることから少しでも先へと手を伸ばしていくような感触があるかどうか。写真だけで写真であることを忘れさせてしまうようなものになっているか、ということです。そういう意味では、昨年よりも今回のほうが面白かったですね。



左から榎木野衣氏、清水穰氏、HIROMIX氏、大森克己氏、佐内正史氏

### 清水 穰 評

「感性が画一化している」

恋人が死んだ、お父さんが死んだという撮った写真が目につきますが、なんとも画一的です。死というそれぞれに重い事実を、「葬式の写真」とか、ふと目にとまった「祖母の遺品」といった、手垢にまみれたアングルと光で撮っていいのか。スタイルを使うだけでは駄目なんですよ。恋愛の写真でも同じ。自分の写真をしっかり見ているのかなと思います。笑いを誘う写真も多かったけど、それもワンパターン。つまり笑っても泣いても感性が画一化しているわけで、そこが怖いと思いました。良かったのは、「写真を見る」という経験自体を問う作品が目立ったこと。確たるものが存在していて、それを「あるがまま」に撮ったのが写真だという前提は崩れて久しい。写真は自明ではないんです。だから、アナログだろうとデジタルだろうと写真の魅力はストレートだと思う。絵じゃないから。そのストレート性が画一化して、撮る力が衰えていることに危機感を持ちました。

### HIROMIX 評

「ストレートな写真が見たい」

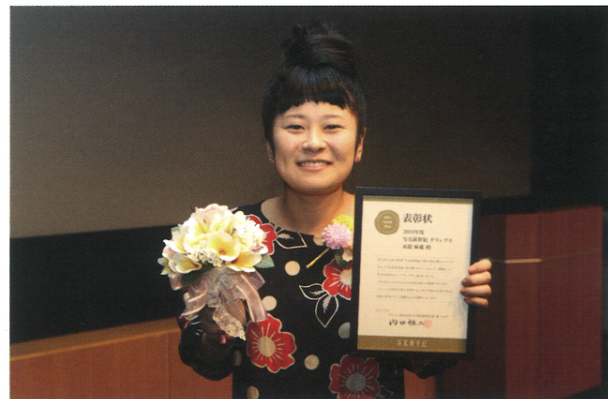
他のコンテストと比べてみても、「写真新世紀」は応募者のクオリティが高いと思います。しかし期待していたよりも、ストレートに写真と向き合っているものが少ないと感じました。デジタル処理を多用したり、加工で高級感を出したり。もちろんそれでもいいんですが、一番大切なのは写真。今回は感情が出ている写真が少なかった。見る人が感動したり、心が動く写真というのは、撮る人の感情が出ているものだと思います。  
それから人を撮っている写真が少なかったですね。ちゃんと人を美しく撮れる人はいつの時代も求められているし、需要があります。それから暗い作品の多さも気になりました。飛び抜けて美しかったり、キレイだったり、元気なものには人は引きつけられる。歌でもそうですけど、嘆くのは簡単で、本当に大変な思いをしている人は、逆に明るい曲で人を励まそうとします。見る人への気遣いも大切で、生きていることへの謙虚さとか、人間性が写真に出る。人が自分の写真を見てどう思うかを客観的に見てみることや、流行を追うのではなく自分なりの提案をすることも良いと思います。迷ったらセンスが良い人からアドバイスを求めてみましょう。

# 2011年度(第34回公募)グランプリ選出公開審査会報告

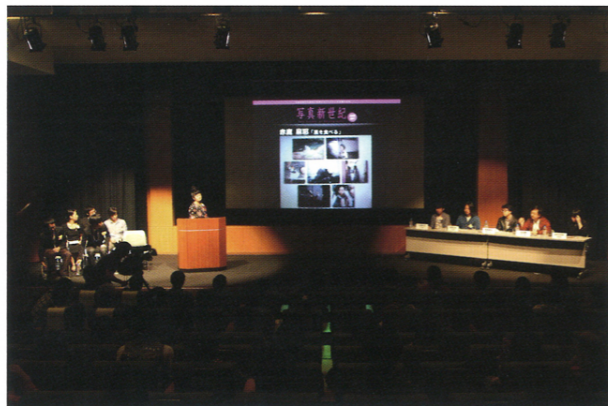
2011年度(第34回公募)グランプリ選出公開審査会が、11月11日(金)に東京都写真美術館1階ホールにて行われました。優秀賞を受賞しグランプリ候補となったのは、赤鹿麻耶氏、奥山由之氏、木藤公紀氏、パトリック・ツァイ氏、山田真梨子氏の5名。候補者全員のプレゼンテーション、審査員との質疑応答が行われた後、審査員による合議によって赤鹿麻耶氏がグランプリに決定しました。

## 2011年度写真新世紀グランプリは、赤鹿麻耶氏に決定!

グランプリを受賞した赤鹿麻耶氏は、受賞の挨拶で「いま、すごくワクワクしています。うれしいし、これからもっと楽しく写真を続けられそうです。」と喜びを語りました。



グランプリを受賞した赤鹿麻耶氏



グランプリ選出公開審査会の様子。向かって左がグランプリ候補者、右が審査員



左から奥山由之氏、木藤公紀氏、パトリック・ツァイ氏、山田真梨子氏

## 公開審査会の様子

大勢の来場者が見守る中で開かれた公開審査会。優秀賞受賞者は5分間のプレゼンテーションを実施し、その後、審査員との質疑応答を行うという形で進行しました。候補者は、自らの言葉で作品の意図や想いを語り、審査員は、より深く作品を知ろうと、さまざまな質問をぶつけました。

「私には辿り着きたい心がある」と、最初にプレゼンテーションを行った赤鹿麻耶氏。作品の根底には「中国で感じた音、色、匂い、空気」が流れていると言います。「頭に思い浮かべたイメージの向こう側を想像してみる。最初のイメージを超えて楽しかったり、うれしかったり、気持ちがいいと感じた時、それこそが私の辿り着きたい心」そして「目に見えないこと、手をつかめないことを、食べて作品に戻すことで、心と身体が軽くなっていくんです」と、創作意欲の源泉について語りました。

奥山由之氏は冒頭できっかけを語ります。「触れることができる距離にいても、触れることができない片思いの女の子。その微妙

な距離感は、夢に似ています。どんなしあわせな夢も、時間が経つと記憶が断片的になり、イメージが薄れていく。やがて消えてしまう夢の記憶を具現化するため、作品をつくらうと思いました」と説明。「2枚の写真を運動的に見せていくことで、記憶の断片性を表現しました」今後も被写体との距離感を意識した写真を撮っていきたく、意気込みを語りました。

続く木藤公紀氏は、「写真を撮るときは、何も考えないようにしています。自分がアツと思った時に、単純に撮りたいと思った時に、シャッターを切っています」と語ります。タイトルの「百A」とは、渋谷のコインロッカーに貼ってあった文字。シンプルで力強かったので、タイトルに選んだのだと言います。展示の9枚に「百A」の写真を選ばなかった理由について「展示はなるべく単純なものを選びました。スタメンを選ぶような感じです」と説明。今後の活動については「今の自分にできることしかできないので、単純にそれをやっていきたい」と淡々と話しました。

日本の写真文化が好きで3年前に来日し

たパトリック・ツァイ氏。動物のイキイキとした表情をとらえた作品は、ジョージ・オーウェルの小説『動物農場』や、ビーチボーイズのアルバム『Pet Sounds』からインスピレーションを受けたそうです。「写真はすべてコンパクトカメラで撮りました。ブレているものもあるけど、不完全だから面白い。友人や恋人を撮るような感覚で、親密性の高い写真を撮れたと思う」と語ります。また「写真は説明したらずまらない。見る人の感性で物語を感じて欲しい」と作品への思いを訴えました。

最後にプレゼンテーションを行ったのは、山田真梨子氏。これまで自尊心を満たすため写真に依存してきた自分が、ありのままの自分で撮影したという作品。「写真なしで私と向き合い関係を築いてくれる家族。この作品は写真という形態ですが、私はまったく写真に依存していません」と自身の内面と作品が評価されたことによる気持ちの変化を打ち明けました。「目がガラスのような感じが、すごくキレイだと思い、一灯のタングステンライトで撮影しています」と自身の作品について語りました。

## グランプリ選出審議から発表まで

### グランプリ選出審議の様子

候補者5人のプレゼンテーションと質疑が終わったあと、審査員は別室に移動してグランプリを決定する議論を交わしました。審査員それぞれが自分の推す候補者の長所をアピールした後、応募作品や展示の印象、プレゼンテーションの内容を総合的に吟味し、作品の表現力や作家の将来性などの視点から話し合いが続きました。白熱した議論の末、写真の技術と表現力、そして作家としての将来性が評価され、満場一致で赤鹿麻耶氏の「風を食べる」がグランプリに選出されました。

### 表彰式の様子

表彰式では、キヤノン株式会社社会文化

支援部部長の澤田澄子が、まず佳作受賞者20名の代表である坂口真理子氏に表彰状と奨励金の目録を授与。続いて優秀賞受賞者5名それぞれに、表彰状と奨励金の目録が授与されました。そして会場の緊張が高まる中、グランプリ受賞者として名前が発表されたのは、赤鹿麻耶氏。赤鹿氏には表彰状と奨励金、副賞としてキヤノンデジタル一眼レフカメラ「EOS 5D Mark II」が贈られました。さらに2010年度のグランプリ受賞者、佐藤華連氏より「作家として自分を表現していくために必要なことは、少しのひらめきと努力です。そして続けることがすべてだと思います。自分が見たいもの、自分にしか見つけられないものを表現し続けてください」とお祝いのエールが送られました。



グランプリを受賞した赤鹿麻耶氏



受賞のコメントを述べる赤鹿麻耶氏

## 審査員講評

表彰式の終了後、5人の審査員から講評が述べられました。大森氏は「優秀賞の選考のため、キヤノン本社の応募作品が並べられた部屋に入る時、すごくドキドキします。写真の概念を広げるような、さらには壊すような作品に出会えるんじゃないかと思って」と選考時の期待感を説明し、「自分の言いたいことと写真を混ぜない方がいいんじゃないかな。写真は写真です。もっと写真を見たいと感じました」と語りました。佐内氏は「心や気持ちは、写真とはあまり関係ありません。写真の良いところっていっぱいあるので、そこを追求して欲しい。赤鹿さんは、写真の力でグランプリを取ったんだなと思います」と若い才能に期待を寄せました。そして榎木氏は「いま、写真は試練にぶつかっている。一人ひとりが写真を撮り続ける意味を考えなければいけない。自分の身体の中に眠っている何かを掘り起こし、それをいかに世の中に表していくか。社会にさらされた写真は、自分の思いとはまったく別に動いていきます。」



各審査員が最後に総評を語った

写真を撮る理由をはっきりさせなければ、撮り続けられない」と警鐘を鳴らし、「赤鹿さんは自分の中にある何かを手探りしながら語り、写真にもそういう部分が出ていました」と評価しました。清水氏は「ブックで見た赤鹿さんの写真には豊かさがあった。非常に可能性を感じました」と評し、「パトリックさんの作品はわかりやすく、アイロニーが効いていて、写真に作り込まれた気持ち良さがあった。とてもプロフェッショナルな仕事だと思いました。木藤さんの作品は、空っぽな自分が空っぽな写真を撮るといった写真の基本。でもそれだけでは、なかなか他人には届かないと思います。奥山さん、山田

さんは、あまり人間関係にまみれず、写真そのものの魅力に自分を委ねてみても良いのではないのでしょうか」とコメントしました。自身も1995年度の写真新世紀でグランプリを受賞したHIROMIX氏は「優秀賞を受賞された方は、これから多くの人の期待を背負うことになります。自分が撮りたいものを撮るといった行為は大事ですが、見る人の視点も考えて写真を撮って欲しい。写真集を見るというのも娯楽のひとつで、ここ10年くらいで写真の良さがますます認識されてきています。世の中の期待に応えた作品を作ってください。今後の活躍を期待しています」と受賞者全員に暖かい言葉を贈りました。



表彰式の後、受賞者と審査員全員揃っての記念撮影

2011 年度 (第34回公募)  
グランプリ 榎木 野衣 選

赤鹿 麻耶  
「風を食べる」





2011年度(第34回公募)グランプリ

## 赤鹿 麻耶 インタビュー

写真を始めて以来、  
頭の中のイメージを写真作品化する試みを続けている赤鹿麻耶。  
「これからもずっと続ける」と決めたスタイルだったが、  
最近少し変化が見えてきた。

### 自分のイメージを写真にしたい

——赤鹿さんの作品は、シチュエーションを作って、現実とも見えるんだけど、かなりフィクショナルな世界を作っています。どうしてそういうスタイルになったんですか？

私と写真の出会いは大学に入ったときなんです。芸術系のクラブに憧れて、写真部に入りました。そこで、自分がイメージしたものを形にできる面白さを知って、それをずっと継続しています。発表するときは、毎回タイトルを変えるんですけど、自分の頭の中



にあるイメージを写真にするというのは、今もこれからもそうだと思います。

——大学では、東アジアの映像文化を学ばれていますね。

はい。高校時代に中国へ行って、自分の中にすごく心に残るものがあって、大学では中国語を学びたいと2年間中国語学科にいて、その後東アジアの映像文化を学びました。映画を見たり、色彩のことを学んだり。2008年～2009年に大阪の国立国際美術館で開催された「アバンギャルドチャイナ」展は感動し

ました。中国のものは気になります。

——その後、大阪ビジュアルアーツ専門学校に進まれています。本格的に写真を学ぼうと思ったのはなぜですか。

大学卒業時に、自分は写真を撮っているけれど、全然写真のことを知らない。いろいろなものを見たいと思って入りました。写真部の先輩の中島大輔さん(2007年度準グランプリ受賞)が、ビジュアルアーツに進学していたのも参考になりました。

——赤鹿さんの作品は、浮遊感がありますね。ボーンと現実から抜けていくような。どういうときにシャッターを押すんですか。

被写体の友人も自分も、風や水の中で動いていて、2人ともテンションがパーっと上がっていきなで、撮り続けていました。演出をするために、ある程度「こういうことをしてほしい」と動きをお願いしますが、遊びながらやっている人が多い。私が楽しくしていたら、相手も楽しくなるし、相手が楽しんでくれたら私も楽しい。



——写真は、何を基準に選んでいるのですか。

前は、煙を使って演出をしたときは、煙が写っている写真を選んだりしたんですが、今回はあえて煙が写っていない作品を選んでいます。イメージしたとおりに撮って写真を見ると、2回同じものを見るような感じで気持ち悪いです。

選ぶときは、「本当にこれはきれいなのかな」とか、「自分でいいと思っている?」とか、いろいろ考えますね。専門学校時代に、見た目だけで写真を選んだりとか、人の言葉に

影響されたりした時期がありましたが、そうではなくて、できるだけ自分と等身大のものを軽い心で選びたい。

——応募作品のブックの構成がいいですね。

実は、けっこう急いであまり深く考えずに選んでいきました。ただ、できたら、写真同士のつながりを感じさせるより、1枚1枚撮っているものの場所とか世界を、飛ばすようにしたい。今回は、できるだけ近くないものを選んでいきました。

### 自然の力を写真に取り込みたい

——作品作りのプロセスを教えてください。

初めはイメージがすごく大事だったんです。奇抜な洋服を着てもらったりして、相手がかっこよきれいに見える写真を選んでいました。でも、最近は顔とかにはこだわりがなく、全体の雰囲気を選んでいきます。写っている人にだけ目が行かないようにするには、どうしたらいいかなと思って、最近は部屋の中とかだけじゃなく、山とか海とか川へ行きます。



火とか水とか風とか、自然が好きなんです。自然は想像していたのと全然違う方向に動いたりするのが、毎回新鮮で。自然の力で写真に動きを出すにも、場所選びが大事です。

——その人を撮るといより、人が入った風景になってきたんですね。

そうですね。今は一緒に遊んでくれる人だったら写ってくれるのは誰でも構わないです。ただ無茶な要求やハードな動きをお願いすることもあるので、必然的に親しい人に

なっています。

——写真美術館の展示はどのように展示しようと思われたのですか？

できるだけ大きく広く見せたいと思いました。

——なぜ大きくしたいんですか。全身で感じて欲しいとか。

それもあります。自分が巨大なものに接して感じるのが好きだからかもしれません。今まで展示の機会はあまりなくて、カフェや

学校のギャラリーで展示するぐらいで、その時はあまり自分自身も在廊しなかったんです。ところが、去年の10月、学校から勧められて、写真雑誌などが企画している「関西御苗場」で賞をいただいて初めて個展をしたんです。そしたら、あるところまですごくよく見渡せるので、大きくこうやって写真を見せられるのはすごいなと思って、空間すべてで見せられる展示の世界に興味が出てきました。見た人が、自由に考えてもらえるような展示をしたいですね。





### 自分を貫く自信をもらった

——グランプリ受賞おめでとうございます。心境は変化しましたか。

優秀賞に選ばれるまでは、みんなが思うような写真というのはストレート写真で、私の作品は微妙な位置にあるのかなと不安があったんです。でも、今回の審査を通じて、審査員の皆さんから周りを気にせず自分がいいと思うことを貫けばいいと言われたように感じて自信ができました。

——美術館での初めての展示、審査を通じてご自身の中で変化はありましたか。

展示をして作品を見たときに、撮影のときの小道具などいらない要素がもっとあるなと思いました。展示をするまでは、今後も今

回応募した作品の続きをやるのかなと思っていたんですが、発表をしたことで「風を食べる」は一つのシリーズとして一区切りついた感じです。写真の作り方として大きくは変わらないですけど、いったん整理して、新しい気持ちで次をやるのかなと思っています。

また、他の受賞者の方々と出会って私はまだ緩い、次に動くに当たっては、自分の写真に対する考え方をもう少し追求しないといけないんじゃないか、と感じました。

——今後のご予定を教えてください。

12月に、いつも撮らせてもらっている友人たちと、海に撮影に行きます。それから上海に行きます。初めて行ったときに、すごく印象に残った街なんですけど、写真を撮りに行ったことがなかったので、4日間ぐらいなんです

けれど、上海の街を撮りたいと思っています。すごく発展しているという上海アートも見たい。強いモノをもらえるかなと思っています。自分の中にあるイメージだけで写真にしていくのは限界がある、新しいものを作るには、どこからかイメージをもらって膨らませていくことが必要だと思っています。受賞でいただいたカメラで実験的に動画も撮っています。インスタレーションなどといった写真以外のことから刺激を受けることで、想像の幅を広げていきたいと考えています。

刺激を受けて頭の中を整理してから、来年の個展に向けて作品を作りたいです。1年後に自分が気持ちいいと思える展示をしたい。自分がやりたいことを貫き通すこと、それがグランプリを受賞した責任かなと思います。



### 作者コメント

私には辿り着きたい心がある。

頭の中のイメージそのままを信じることはないし、必ず疑う心が離れない。繰り返しの作業で知ったこと。そうあるべきだと思うこと。イメージの向こう側を想像する、ただの予感でしか無いけれどそれを気持ちよいと感ずるか。それとも心に何か引っかかったり、不安に感じるのかどうか。私はいつもそこに敏感でありたい。清々しい気持ちで、いいな、やってみよう、と思えたら、その時は頭の中で想像することなんかよりずっと楽しいこと、興奮することが待ってる。辿り着きたい心はいつもそこにある。私は目には見えない、手では掴めないような事を、食べて、写真に戻して、その繰り返しの中で自分自身の事や周りの世界の事を少しずつ理解しようとしている。何よりも自分が知らないものを見てみたい。それが一番わくわくする。

### 選: 榎木 野衣

写真としての“大きさ”を感じます。それは言葉に集約できない、一枚一枚からも細部からも、そして写真の総体からも発散されている、一種の「気」のようなもの、と言っていいかもしれません。だから、どの写真も「見極められない」。そこに惹かれます。写真を見るときには、たいてい「何が写っているのか」を見てしまいがちですが、この写真には、見るほどに対象が別の物に変化していくような運動があります。写真が絶えず形を変え、謎解きも止まらなくなる。けれども、その正体は結局わからなくてよいのです。目まぐるしいイメージの攪乱があればよいのです。“大きさ”と言ったのはそういうことです。優秀賞にふさわしい未知の力量と、更なる飛躍を感じさせます。



赤鹿 麻耶 あかしかまや  
「風を食べる」

ブック/B1/36点/インクジェットプリント

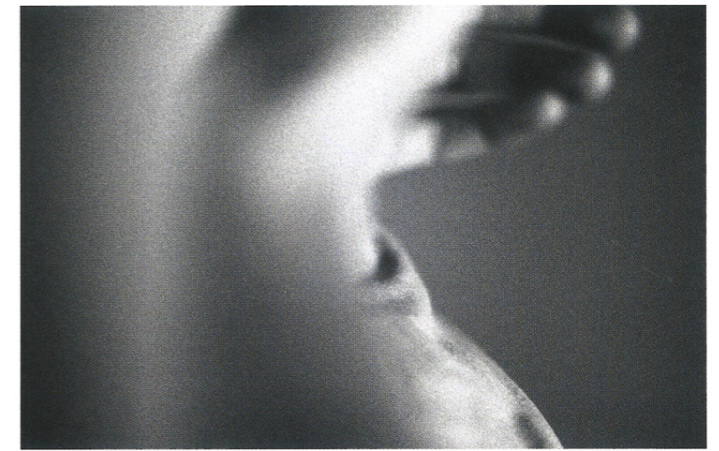
### プロフィール

1985年 大阪府生まれ  
2008年 関西大学中国語中国文学科  
東アジア映像文化論専攻卒業  
2010年 ビジュアルアーツ大阪写真学科夜間部卒業

2011 年度 (第34回公募)  
優秀賞  
HIROMIX 選

奥山 由之  
「Girl」





2011年度(第34回公募)優秀賞

## 奥山 由之 インタビュー

学生映画で賞をとり、ファッション写真などの仕事もする奥山由之。  
自分がみた夢を表現した作品をブックにまとめた。  
夢と現実が入り混じる作品はどのように生まれたのだろうか。

### 夢の繊細さを表現したかった

——奥山さんは映画を作り始めたほうが、写真より早かったんですか。

そうですね。中学の3年間でクレイ・アニメーションを作っていて、やはり映像に対する興味から、高校生になってからは映画を作るようになりました。とにかく何事も自分でやってみたい性格なので、監督や脚本、撮影、美術、編集に至るまで一人でやっていました。2010年に俳優の竹中直人さんにも出演して頂いて4作目の映画を本格的に作ったのですが、その作品でやりたいことは全部やりきったと思えたので、今はしばらく映画から距離

を置いています。

——写真を始めた理由は。

映画を作るとき、カメラワークの構図を決めるために中古カメラを買ったのがきっかけです。そのカメラで写真を撮っているうちに、台詞や音の無い“画”のみで何かを表現する、という写真の面白さに興味を湧きました。映画だったら、登場人物の関係性というのは見ているうちにだいたい把握できますよね。ところが写真では、その被写体が恋人なのか家族なのか、はたまた他人なのか、断定することは難しいと思うんです。写真は抽象的で曖昧なところがあり、いい具合にその作品の

意味合いを断定させない、という魅力があると思います。そういった魅力を活かして、言葉では表現しにくい、心の中にモヤモヤと浮遊しているものや、想像と現実の境界線にあるものに目を向けたいいつも思っています。

——応募作の「Girl」の発想のきっかけを教えてください。

深夜、ベッドに入っても、浅い眠りを繰り返すばかりで、明け方まで眠れない時期があったんですね。そんな時、早朝のまだ薄暗い明かりに照らされたシーツのドレープが目に入ったんです。奇跡的に作られたその緩やかな曲線は、僕が少し触っただけで簡単に崩れる。

その脆さや儂さゆえの美しさが“夢”や“被写体の女の子と自分の関係性”を連想させた。夢は、きれいなものをみても、すぐ忘れてしまうでしょう。そういった誰しもが経験する繊細なものであったり微妙な心の揺らぎのようなものを表現したいと思ったんです。作品に登場する女の子は、実際によく夢に出てくる友人です。

——カラーとモノクロが混じる夢なんですね。

そうですね。ポラロイドフィルムで撮った写真をスキャンして拡大したり、一度プリントアウトしたものを複写したり、ストレートにフィルムで撮ったものもあります。夢は、統一



感なく、とびとびでつながっているものだったりしますが、そういった雰囲気メディアを変えて表現したかったんです。複写すると、イメージののっぺりして現実と写真の間に一段階の距離感が出る。その距離感がまさに僕とこの友人との心の距離感を表していると思います。

——映画をやっていただけあって、シークエンスがすごくしっかりしていますね。

夢と夢の区切りとして、シーツのカットを入れることによって、短い夢を見ては目を覚まし、現実において夢を具現化したシーツが目に入る、という繰り返しの流れを作りました。シー

ツがあまり多いとしつこく見えるので、流れかつながりやすいところは、最終的にシーツの写真は何枚か外しました。シークエンスは、作品を作るときに何よりも一番意識している要素です。撮った写真の中から、何を選んで、どこからどういう流れで見せていくのが、その写真家の力量を決めるとしています。

——展示の構想は？

受賞が決まった直後、4m×4mの壁面で自由に展示していいという条件のもとに、まず適当にレイアウトのラフ画を描いておいたんです。勿論、展示プランを練っていく数ヶ月のうちに、そのレイアウトではない別のレイ

アウトにどんどん変化していきました。何度も悩み、二転三転して、最終的に「これだ！」と決まったレイアウトの図面をフレーム業者の方のところへ持っていったんです。それから少しして部屋を整理していたら、存在を忘れていた最初のラフ画が出てきたのですが、見てみると驚くことに、あれだけ悩んで決めた最終決定のレイアウトと全く同じだったんです。悩んで悩んで結局一周したんですよ。やっぱり、なんとなくでも直感的にいいと思っているものこそが本当に自分が作りたいものなんだろうなと確信しました。

#### 作者コメント

人は、日々の生活の中で得た情報を、眠っている間に整理しているそうです。色や音、匂い、温度。喜びや悲しみ、安らぎや焦燥。いつの日か出会った人や、いつの日か見た景色。必要とされる情報は残され、必要ないと判断された情報は捨てられます。その整理の過程を記憶している場合、僕らはそれを夢と呼びます。そして、夢というものは目を覚ました瞬間からすごい速さで色あせて、まるで遠い過去の記憶の様に現像されるのです。この作品は、そんな一連の精神的イメージと感情の記録を写真にして出力したものです。思い出せるけど見えない、記憶についての記録。確か、こんな感じだった。

#### 選: HIROMIX

恋をしている甘い雰囲気が少女漫画や昔の映画の雰囲気があって良いですね。カーテンを写したものの逆光のシーンも、ロマンチックです。荒い質感も、時代がわからない感じで良い。今回の公募には加工してある写真が多かったですが、これは写真らしい写真。ストレートに写真と向き合っている感じがします。暗い作品が多い中で、この作品には明るさや前向きさがあります。意図的に顔がはっきり写っていないようですが、人物写真も見てみたいですね。



奥山 由之 おくやまよしゆき  
[Girl]

ブック/四切/33点/インクジェットプリント

#### プロフィール

1991年 東京都生まれ  
2007年 全国高校生映画コンクール グランプリ  
2009年 慶応義塾大学法学部入学 在学中  
2010年 個展「5」・個展「s/s」  
2011年 写真集「Amp Cut」出版  
第3回沖縄国際映画祭 特別上映

HP:y-okuyama.com

2011 年度 (第34回公募)

優秀賞 清水 穰 選

木藤 公紀

「百A」





2011年度(第34回公募)優秀賞

## 木藤 公紀 インタビュー

ズバツと被写体に接近したスナップ写真のブックで応募した木藤公紀。写真の並べ方に、自分なりの小さな遊びがあると話す。作品に秘めた意志と写真生活について聞いた。

### 毎日写真を撮った1年間

——写真を撮始めたのは大学時代ですか。

はい。仙台でした。そこで写真部に入って、モノクロの現像などを覚えました。部室の横にある暗室が使いたい放題だったので、よく夜中にラジカセでCDをかけながら作業をしていました。昔は、人がいない道とか壁のシミとかばかり撮っていたんですが、最近は外に開いて来ました。何でも撮りたくなったので。

——大学を出て去年東京に来られた。就職は考えていなかったんですか。

就職に向いているとは思えなくて。写真を続けたいから東京へ行くと決めました。大学4年生からカラーで撮り始めたんです。東京

だと現像所を借りることができるので。

——東京に来ることに、ご両親はどんなふうにおっしゃっていましたか。

卒業後3ヵ月ほど実家に戻った時に、写真を撮りたいと初めて言ったら親は「やりたいならやりなよ」と言ってくれました。なのに、新しい生活に追われて写真が一番じゃなくなっていました。夏にまた実家に帰った時に、駅まで迎えに来た母親が「カメラ持っていないね」と。その時は、カバンに入れていたんですけど、そんな風に言われて、冷や汗が出ました。

——覚悟が試されたみたいですね。

何やっているんだろうと。そこから毎日出

かけて撮るようになりました。1日1枚しか撮れなかったとしても、365枚は撮れるはずだと考えて。とにかく毎日撮るとだけ決めました。

### いつも「何か起これ」と念じる

——真ん中にどーんとモノが写っている写真が多いですね。

構図を考えたり、撮るものを決めるということせず、単純にやろうと思いました。だからとりあえずなるべく正面と真ん中という感じで撮っていました。

——そういう撮り方にしようと思ったのは、誰かの影響があったんですか。優秀賞に選んだ清水積さんは、中平卓馬さんの影響を指摘

されていましたが。

佐内正史さんが好きだったんですが、どうせ同じようにはやれないし、自分にできることをするしかないと思って。中平さんの狸の写真の思い出すことがよくありました。前に見たことがあって。

——自分の思う写真が、そこにあったということですか。

いえ。結局自分のできることしかできない。善かれあしかれ。それと、撮影に出かけている間、「何か起これ」といつも思うんです。何か「おおっ」っていう。そういう瞬間はあまりないし、撮り逃がすし、1日2~3枚ぐらいしか撮れないです。ブックにある大根の写真は練馬で、畑の横の直売所で撮ったんです。包丁



を撮りたいと思っていたら、ちょうどあったんですよ。でも、包丁だけだと小さくて物足りない。横にあった大根がいいなと思ったので一緒に撮りました。

——木藤さんの作品は、強い写真ですよ。このカメラを構えている外国人観光客の方も、面白い洋服を着ていますね。

渋谷の交差点で撮ったんですけど、遠くからパーカーが目立つなと思って。隣の写真はベンツのマークです。外国製と外国人。

——並べ方につながりがあるんですね。

自分なりの遊びなんです。この、木の上にいる白と黒の模様の猫の写真と、パトカーを撮った写真が似ていると思って、友達に「何

か気づく?」と見せたら「救出?」と言われた。そういうのも、そうやって並べているからだと思う、面白いから続けようと思いました。歯科の看板の写真の隣に車の写真を持ってきたのは、雪が溶けた後の水滴が輝いている窓が、歯みたいに見えるから。

——モノそのものより、光の反射とかにすごく反応しているんですね。

結局、天気のいいときが好きです。すごく晴れている日に、8枚ぐらい撮れることもあるんですが、途中で冷静になる。「今、情性で撮ったな」と。そうしたら冷めちゃう。1日200枚くらい撮りたいですけど。

——最後の写真だけ、海辺の綱引きで人の

群像みたいになっていて、印象が違いますね。

人は撮りたいけど、東京には知り合いがないから、スナップにいかざるを得ない。たまに声をかけて撮らせてもらったり。最後の写真は地引き綱ですけど、前の2枚がカーテンで、幕引きで終わり、次に行くみたいな感じがするのでいいなと思って、最後に入れました。

——展示する作品は9枚ですね。どのようにして選んだんですか。

なるべく単純でいい感じのもの。写真と写真のつながりみたいなのは一度やめようと思いました。



作者コメント

素敵なものが好きです  
ほしいものは偶然です  
なんだかそういうものです  
撮りたいのは

それだけだけど  
いろいろあるから  
もう今は今でこれはこれで

呼吸して歩いてる  
それだけはずっと同じなんです

選: 清水 穂

下地となっているのは、たぶん中平卓馬でしょう。撮りっぱなしというか、写真であるというだけで成立するような写真の強さ。その意味では良くも悪くもお手本があるんですけど、この作品は、全体に寒々しい印象を与える。何の意味もないものをポンと撮って、日常の断片を切り取ったというより、その断片からすべての意味が脱落してそれだけになってしまった一種の虚しさがある。目には写っているが、そこに意味を見出せないことへの興醒め、自虐、危機感といった暗い感じを受ける。また、自分の写真をよく見きって構成していると思います。



木藤 公紀 きとうまさのり  
「百人」

ブック/四切/38点/Cプリント

プロフィール

1984年 愛知県生まれ  
2009年 大学卒業  
2010年 上京  
現在アルバイトしながら活動中

2011年度(第34回公募)  
優秀賞 大森 克己 選

パトリック・ツアイ  
「God Only Knows」







2011年度(第34回公募)優秀賞

## パトリック・ツアイ インタビュー

パトリック・ツアイは、  
イェール国際モードフェスティバル入賞候補者に選ばれるなど、  
海外では注目の写真家。

日本に拠点を移した彼の作品世界とは。

### 動物の目線で撮影する

——応募作品の「God Only Knows」は、すごく完成度が高い作品ですね。都会の中の人物を撮ったこれまでの作品とは全然テイストが違います。なぜ牧場の動物に目をつけられたんですか。

写真家4人、現代美術家、画家と7人で作ったハジメテンというグループで、去年11月に那須高原で開催されたアートイベント「スペクタクル・イン・ザ・ファーム 2010」に参加したんです。イベントで那須の記録をしている間に、那須どうぶつ王国に行っただけです。そこでみんなから少し離れて歩いているうちに、白い馬に出会った。その馬の眼が幽霊のように見えて触発され、冬にもう一度行ってこの

作品を撮りました。

——クローズアップの仕方とか、動きのある動物の捉え方に独特な印象があります。

普通の動物の撮り方とは違う撮り方をしたかったんです。部分的に見せたら、一見何か分からないように見えるし、絵画のような感じにもしたかった。人が存在しない動物だけになったような世界を意識しました。

三脚を構えて一眼レフのような大きなカメラを使うのではなく、コンパクトカメラを使いました。被写体に近づいて、親密な関係を築きたかった。動物の目線から写真を撮りたかったんです。

### 日本で写真家として認められたい

——母国アメリカでも、日本に来る前に住んでいた中国でも実績がおありだと思うんですが、なぜ写真新世紀に応募されたんですか。

日本に来る以前に梅佳代さんと知り合っただけですが、彼女から写真新世紀が日本で有名な写真コンテストだと聞きました。僕は日本では無名だったので、このコンテストで賞を取って知られるようになったかった。

——梅佳代さんの作品はお好きですか。

「男子」の展示と、写真集の「うめめ」を見たことがあります。最初はかわいいなと思って見ていたんですが、だんだん、この人は技術を学んだからというのではなく、ごく自然に

これを撮って自分の世界を築ける人だと分かって、天才だと思うようになりました。

——日本の写真については、どのようにご覧になっていましたか。

ニューヨーク大学の学生だったときに、ドイツの出版社から出しているHIROMIXさんの写真集を見たのが、転機になりました。ヨーロッパの写真はコンセプチュアルですが、HIROMIXさんの作品はストレートなスナップショットだったので。大学では映画を学んでいたんですが、映画はいろいろな人やお金が絡むので疲れていました。その後台湾に行って写真を始めるんですが、写真は制作が早いし、1人でできるのがよかったです。



—なぜアメリカから、台湾や中国に移られたのですか。

以前、日本に留学したことがあって、日本が台湾のどちらかに行こうと思いました。台湾には親戚もいるし、コミュニティも小さいので安心だろうと。その後中国へも行くんですが、そのなかでも、日本の文化が一番気になっていました。中国でもアートは流行っていて、知れ渡る速度も非常に速いので、2年ぐらい住むうちに僕の知名度も上がった。日本はアートの水準が高いと思うので、底辺から始めることになったとしても水準が高い日本で頑張りたいと思ってこちらへ来ました。

—中国では、代表作品のフォトダイアリー「My Little Dead Dick」も成功しましたね。それ

は大きな成果だったのではないですか。

自分の中の成果としては最大級だったのですが、一緒に作品を作ったパートナーとも別れて作品は終わりました。その後どうしていいかわからなくて、燃え尽き症候群みたいになっていました。日本に来て数年間は不調が続いて、写真を辞めようかとも悩みました。そんな中で那須のプロジェクトが浮かんで、自信につながりました。

—現在、ブログで展開されている写真と文章の作品、「TALKING BARNACLES」は、日本語で「しゃべるフジツボたち」という意味ですね。面白いタイトルだと思います。

これは、3月11日の東日本大震災がきっかけで始めたプロジェクトで、自分の中では最

高傑作です。自分が住んでいる街のスナップと日記の文章を組み合わせています。フジツボみたいなすごく小さなものがやっていることが、大きなことを言うより重要だという意味でつけました。今回の地震は海外のメディアも取り上げましたが、現場で何が起きているのか全然わからなかった。それよりルームメイトが地震のことをこういう感じ方をしたみたいなき細な感覚がすごくよく分かったので、身近な小さなことを撮ることが大切に感じられるようになって、このタイトルをつけました。このシリーズを続けることで、長いシリーズで連続写真を撮る、文章を書くという今までやったことがないことを始めました。「God Only Knows」もこれも、いずれ本にまとめたと思っています。

#### 作者コメント

大学を卒業した後、僕はアメリカから中国へ移住し、当時付き合っていた彼女と「My Little Dead Dick」というフォトダイアリープロジェクトを制作し海外で注目を浴びようになりました。プロジェクトが修了した時、常に日本の写真に魅力を感じていたので、活動の場を日本へ移しましたが、このプロジェクト以上の出来の作品を撮るのは不可能だろうと思っていました。その後4年間、新しい写真を撮ろうとしても方向性を見失うばかりで、どんどん歳を取っていただけでした。しかし去年の秋に、「God Only Knows」のアイデアを思いつきました。この作品は僕にとって最後の挑戦となるもので、もし創りあげることが出来なかったら写真を諦めようと思っていました。しかし今、数年間に及ぶ葛藤の末、やっと自らの決断を信じる事が出来るようになったと思います。

#### 選: 大森 克己

「モノラルなんだけど奥深い」という感じがします。写真がちょっと上手すぎるけどね(笑)。表面的な動きという意味ではなく、躍動感がありますね。動物だけではなく、周りの空気も。全体に風通しがいい感じがする作品です。自分を見つめすぎてない、目が外に向いているのいいですね。彼が次にどこに行くのか、何を撮るのか、見てみたいです。



Patrick Tsai パトリック・ツァイ  
「God Only Knows」  
ブック/A3/56ページ

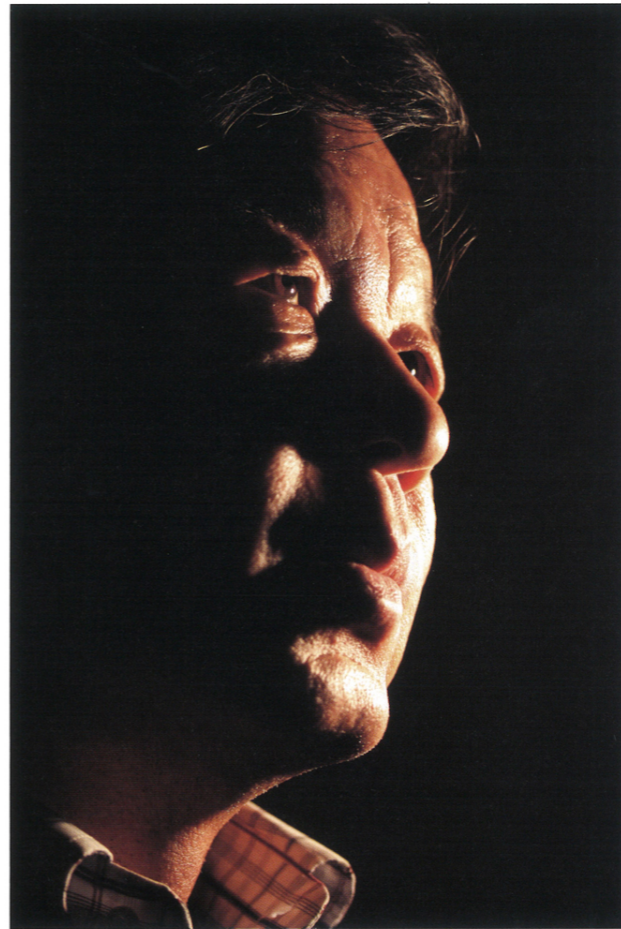
#### プロフィール

1981年 アメリカ生まれ  
2003年 ニューヨーク大学映画学科卒業  
台湾へ拠点を移し、写真を始める。  
2006年 中国へ移住し、フォトダイアリーシリーズ「My Little Dead Dick」を制作  
2008年 イエール国際モードフェスティバル入賞候補者  
北京にてコンバースオリンピックキャンペーン用広告撮影  
日本へ移住  
2011年 現在フリー

Website: [www.hellopatpat.com](http://www.hellopatpat.com)  
[www.talkingbarnacles.com](http://www.talkingbarnacles.com)  
Email: [hellopatpat@gmail.com](mailto:hellopatpat@gmail.com)

## 山田 真梨子

### 「家族の肖像」



## 山田 真梨子 インタビュー

地元、静岡県清水市の街づくりを意識したポートレート作品の撮影、発表活動をしてきた山田真梨子。家族の写真で優秀賞を受賞できたことがうれしいと話す彼女に聞いた。

### 人と向き合うツールだった写真

——写真を始めたきっかけを教えてください。

写真が好きで、中学・高校時代に風景とかを撮っていたんですが、友達の子をすごく可愛く撮れて、人を撮るのが面白くなったんです。女の子ってグループを作るじゃないですか。私はその中に入れなかったんですが、カメラを持つと人間関係を築ける。コミュニケーションの手段としてカメラにすごく頼っていて手放せなかったんです。

——意識して、人の写真を撮ろうとしたのは

はいいつ頃ですか。

大学のときに、写真家の瀬戸正人さんが運営している「夜の写真学校」に通ったんですよ。瀬戸さんから「人を撮るんだったら、マクロレンズのほうがいいんじゃないか」といった写真的なアドバイスをもらった。写真は、ただシャッターを押すだけのものじゃないと考えるようになりました。ライトを使って撮り始めたのも、大学に入ってからです。

——地元の静岡県で街づくりを担う「100人の肖像写真展」や「200人肖像写真展 in 静岡」などの個展を開きましたね。地元の人たちを

撮る発想はどこから出てきたんですか。

東京から戻ると、清水市は商店街もシャッター通りになっているし、寂しい街に見えた。大学で都市計画を学んだので、地元のために何かできたらと思って写真展を計画しました。写真展をやると、その場にいろいろな人が来て、話をする空間ができるじゃないですか。

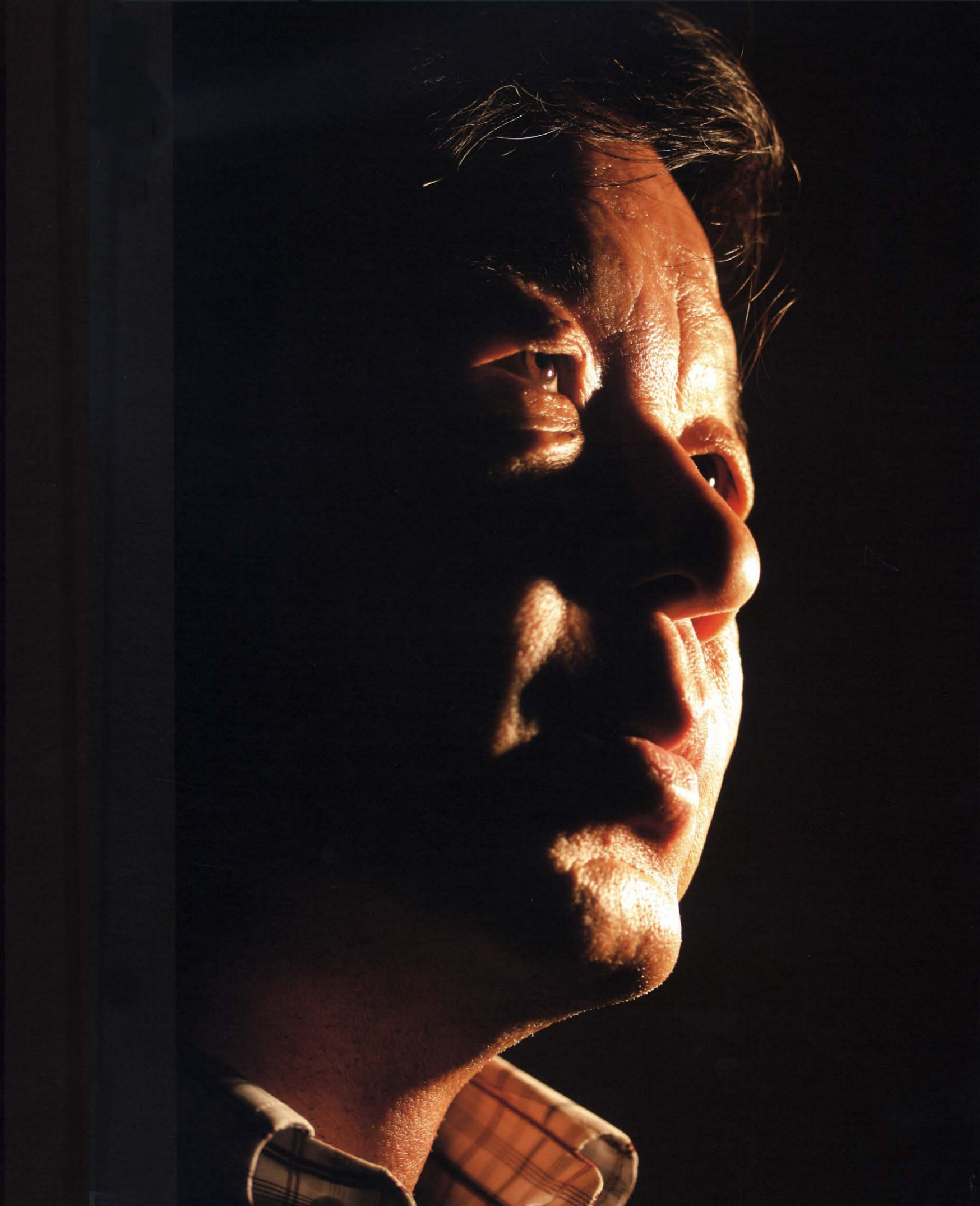
——たくさんの人を撮っていますが、どうやって声をかけたんですか。

初めは友達。その友達が「この人面白いよ」と紹介してくれて、紹介、紹介で撮っていきました。就職浪人中だったので、撮らせてくれ

ると言ったら行って、とにかくすごくたくさん撮っていましたね。

——地元の人を撮ると友達を撮るのでは違うでしょう。背景も自分のものにして表現することは難しくなかったですか。

写真を撮るのは人と向き合う作業だから、写真的にこう撮ろうじゃなくて、「この人はこう写さなきゃいけないのかな」というのが何となくつかめてきます。私を全く知らない人と、カメラだけを持って向き合うでしょう。ちゃんと自分の考えを持って写真に取り組みなきゃと思うようになりました。(→p.39)





——撮り方なのですが、一方からライティングして見上げるようなアングルが多いですね。

女の人を撮る場合だと、目を大きく見せたいしシウが目立たないようにする。一番その人が喜んでくれる撮り方をしたい。目に焦点を当てるとすごくきれいだなと思って撮っているんですが、ちょうど透き通って目が写るのが横顔のこの角度なんです。

——現場ではどんな風に撮っているんですか。

撮影場所はスタジオではなく、ごく普通の自宅です。部屋を真っ暗にして、タングステンライトー灯を被写体にあてて撮影しています。オレンジ色の光に包まれた被写体に向かいあうのって、すごく神聖な気分になります。本当にすごくきれいで不思議な時間です。

——影響を受けた写真家はいますか。

荒木経惟さんや東松照明さんが好きです。林忠彦さんの『日本の経営者100人』みたいなスタイルのものをやってみたいと思います。いろいろな人と会えていいなと思うし。

——山田さんにとって、コミュニケーションというのは大きな要素なんですね。

はい。荒木さんはヌード写真もたくさん撮っているじゃないですか。女の人がある気になる環境を作れる荒木さんがすごい。人と向き合う力がすごいんだと思いますし、私もそういう方向でやっていきたいです。

**原点を確認した作品で受賞**

——今回の作品は家族を撮ったものですね。

「自分がなんで今ここにいるのか、なんで写真を撮るのかちゃんと考えてごらん」と言ってくれた人がいたんです。それで、両親がいないきゃここにいないよなと思った。知らない人の写真を撮るのも「なんでそんな危ないことを」と心配するので、親から逃げているところもあったんですが、撮らなきゃと。

——その中になぜ犬がいるんですか。

家族だから。犬は血もつながっていないのに、私を家族と思ってくれているのが分かる。

私が写真を撮るやろうがやるまいが家族なんですよ。両親もそうです。だから、カメラに頼らずに私という人間のままで撮った写真。

——無条件に付き合ってくれる人と向き合うのは、写真家として撮るときと何か違いました？

「ああ私、この人の子どもなのかな」みたいな感覚と、親は親で人生を生きてきたということが両方ある。不思議な感じでした。親の写真撮ったことで、「写真を撮ってごらん」と改めて思いました。そういう風に撮った写真で評価をされて、すごくうれしいです。

——今後の目標を教えてください。

今まで被写体になってくれた人の反応とか意見を気にしすぎていたところもあったから、これからはそういうことから少し自分を解放して、もっと自分勝手に写真を撮ろうかなと思っています。写真に自分を託してしまうというか。これからはもっと馬鹿になって、どうぞごく真剣に写真を撮っていくつもりです。

#### 作者コメント

この二人の男女の出会いによって生まれた私は、自らの内に従いずっと写真を撮り続けてきました。この写真は「生まれる」という受動のただ一点に、「写真を撮りたい」という能動をぶつけて生まれたものです。

私にとって写真を撮るということは人とかかわるということであり、人間関係を築くという点において私はずっと写真に依存してきました。

もしかしたら、写真に依存することなく人と向き合えるようになりたくて写真を撮ってきたのかもしれませんが。

でもこの写真は私が写真に依存することなく、ありのままの私で家族と向き合い撮影したものです。

こうして撮影した写真が多くの方々から批評を受けることとなり、もう写真に依存することなく、写真から離れるときがきたのかもしれませんが。

でもそうだとすると、私はやはり写真から離れることはできません。

それは、依存ではなく、確固たる意志として。

#### 選: 佐内 正史

「家族の肖像」というテーマで3点だけ。これはちゃんと選んだんだなって感じがするし、力強くて超ストレートに撮っているのが、キレイな撮影だな。

犬が入ってる事で何か越えてくる。やっぱり自分より写真のほうが越えちゃってるのが写真だ。



山田 真梨子 やまだ まりこ

#### 「家族の肖像」

プリント/全紙/3点/インクジェットプリント

#### プロフィール

1987年生まれ  
筑波大学卒業(都市計画専攻)  
現在は、地域貢献と独自性ある経営を行う全国の中小企業経営者への撮影取材に取り組んでいる。  
地元銀行に勤務する傍ら、都市計画における地域活性化の視点で写真活動を続けている。まちづくりを担う「100人の肖像写真展」をホテルクエスト清水で、「200人の肖像写真展」をグランシップ静岡で、また東京新宿ギャラリープレイスMにて、人間の内面に迫る個展「Shell」を開催。



内倉 真一郎 うちくら しんいちろう

「人間図鑑」

プリント/1,100mm×1,500mm/12点/  
インクジェットプリント

作者コメント

写真になった貴方は何者でもなくなる  
貴方は私になる  
そこに写っている貴方は  
私のレプリカである

選評

少年が口を開けている写真がありますが、あれが特に好きですね。写真を大きくしているところも好きです。大きくするってことが写真っぽいし、細かいところに潜んでいるものを見ることにもなるので。それに、真っ直ぐ人と向き合っているところ、古風ですけどいいと思います。ただ、「図鑑」というからには、もうちょっと分量があるといいですね。



高橋 マナミ たかはし まなみ

「later and ago」

プリント/全紙/27点/タイプCプリント

作者コメント

制服を着てみてもらいました。数年前の高校生だった彼らと、高校生でなくなって数年後の今の彼ら。

選評

青春の終わりというか中年の始まりというか……。そういう年齢の人たちに学生服を着せている。ちょっとイタイというか、そこはかとなく漂う違和感が面白い。ポートレートとして優れているような気がします。ただ撮っているのではなく、ひとつフェイクを入れている。一見なにげないように見えて、やっぱり仕組みがあるところが面白い。何回も見たくなくなります。



小山田 邦哉 おやまだ くにや

「PLANET」

ブック/A3/10ページ/インクジェットプリント

作者コメント

戦争跡地、世界遺産、大都市のビル群。誰もが知っている世界の観光名所の地平線を黒く塗りつぶし、歴史的背景や町並みを消し去り地表面だけを露呈させてみた。ここは地球か、どこぞの惑星か？

選評

まず、きれいだなって思いました。ニューヨークとかアテネとかいろんな場所を撮って、上を黒く塗りつぶしているわけだけど、本当にその場所で撮ったのかどうかはわからないな。どの絵もちょっとウソっぽく見える。その虚実皮膜の面白さが深まっていくといいですね。「私は船乗りでした」というのとかもね。



山本 渉 やまもと わたる

「線を引く」

ブック/大四切/19点/ゼラチンシルバープリント

作者コメント

森で自分を撮りました。この森は私にとって大切なもの。その存在を捕らえるために中に入ります。

選評

人工的な世界と自然のあわいで写真を「創る」という態度が清々しいです。プリントも丁寧で好感が持てます。よりスケールの大きい次の作品を期待します。



阿部 祐己 あべ ゆうき

「ボイジャー」

ブック/A3/24点/インクジェットプリント

作者コメント

光を求めて  
光の根源は恒星の明かり  
惹き付けられるのは  
その先に真っ黒なブラックホールがある  
からなのかもしれない

選評

なんだか映画みたいな印象の作品だね。  
映画っぽい写真。岩の写真とか、傘、地  
面、雪、水草、写ってるものや写し方が  
キレイだし、星の写真もいい。星の写  
真の印象が強く残るね。とてもいいね。  
これは写真の作品なんだけれど映像と  
写真の中間ぐらいの作品。その中間に  
みえるところが好きだな。



小竹 徹 こたけ とおる

「autonomy and weakness」

ブック/A4/43ページ/インクジェットプリント

作者コメント

河川敷の、取り壊しが進む不法耕作地。  
弱々しくも微かな自律の気配を感じさ  
せる空間に興味を持ち、撮影を行った。

選評

土手の写真が好き。土手って何かざわ  
ざわするような、引き込まれていて、  
知らない間に時間が経っちゃった感じ。  
そういうざわざわがこの写真にはある。  
寄りの写真が好き。バナナとか。



吉楽 洋平 きちらく ようへい

「Fireworks\*」

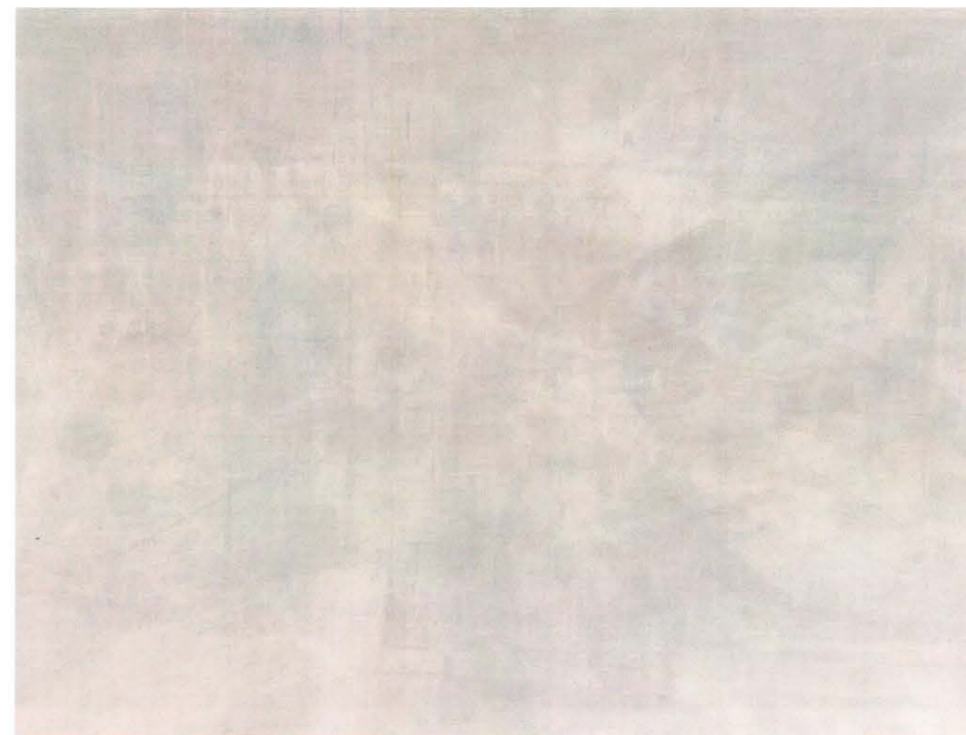
プリント/半切/50点/インクジェットプリント

作者コメント

海辺で花火をしている人を見ていたら  
不思議な感じがした。この作品にはその  
感じが良く写っていると思う。

選評

この打ち上げ花火の写真がすごくいい  
なあと思う。見ている人たちもバッチリ。  
焦げ跡みたいな影も写ってる。日本だ  
なって感じがすごいする。魂のような  
写真かたまり。



福士 順平 ふくし じゅんぺい

「険ノムコウニ」

プリント/550mm×413mm/2点/インクジェ  
ット  
プリント  
ブック/大四切/40ページ/インクジェ  
ット  
ット

作者コメント

この作品は記憶をテーマに制作しまし  
た。遠く離れてしまった友人にこの受  
賞を伝えたいです。

選評

枚数もあるんだけど内容はあまり変わ  
らない。黒の中に光がある。黒と残像  
がキレイ。洗い感で墨のような美しさ  
がある。この作品は硬派だと思った。

# 佳作受賞作品 選: 榎木 野衣



菊池 佳奈 きくち かな

## 「百色むすめ」

ブック/A3/64点/インクジェットプリント

### 作者コメント

表情も仕草も万華鏡みたいにくるくる変化していく女の子たちを表現しました。

### 選評

20世紀の大戦間に人体を使った超絶的な映画の演出で人気を誇ったコレオグラファーにパスビー・パークリーという作家がいます。それを踏まえているかはわかりませんが、ここでは、パークリーに近い世界が現代の日本の若い女性に置き換えられて、別の次元で息を吹き返しています。また、コンピューターによる合成ではなく、実際に振り付けをして撮っているということで少女たちのポーズには細部で微妙なズレが生じています。たんなる対称ではないことで、万華鏡のようで万華鏡でない。そのズレにこそ、この写真の面白さがあるのです。この効果を生むのに払われた衣裳や演出への気遣いも、実に練られていると思います。



木村 リベカ きむら りべか

## 「やわらかい家」

ブック/A4/70ページ/インクジェットプリント

### 作者コメント

赤い三角屋根に、白い壁。小さな家。緑の丘の上に立っている。見たかった風景を、嘘っぱちの世界でつくろうと思いました。

### 選評

トンガリ屋根の赤いモチーフが、いろいろな場所を旅するという設定です。ただし、風景の中を同じモチーフが繰り返しあらわれるというだけでなく、その旅の合間にモチーフそのものが何度も洗濯されます。旅と洗濯という日常と非日常が交互に挟まれることによって、そこに不思議なリズムが生まれています。考えてみれば、旅も洗濯も回るものにはちがいがありません。また、旅に洗濯はつきものです。この進行にふと動物が絡んできたり、思わぬ砂にまみれたりしても、また洗濯されることで、また新しい写真の旅が始まる。こういうリズムを経て物事が淡々と推移していくところに、独特の楽しさと軽みを感じました。



坂口 真理子 さかぐち まりこ

## 「訪々入浴百景」

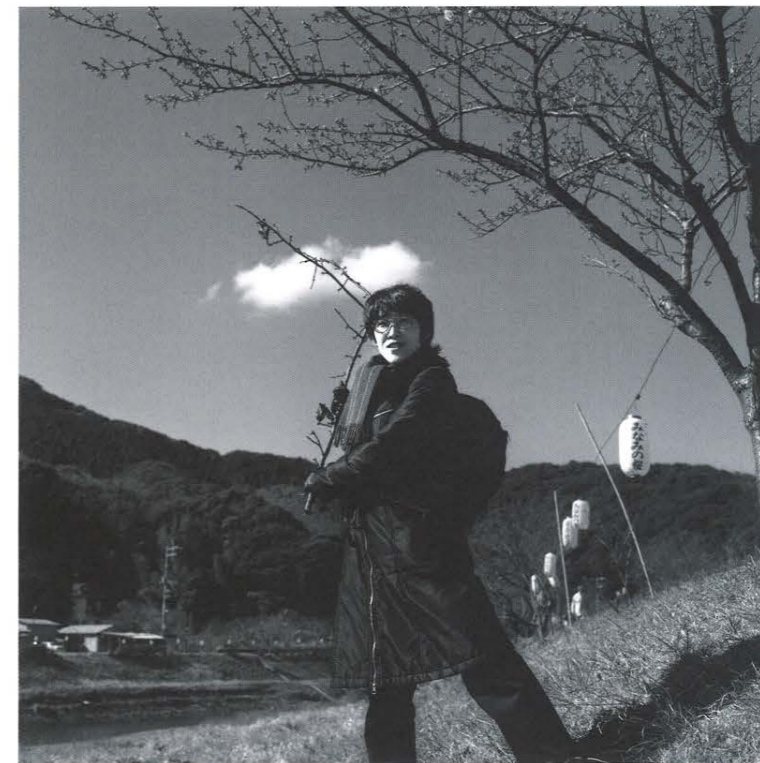
ブック/A3/22ページ/タイプCプリント

### 作者コメント

撮影にご協力頂いた皆様に感謝いたします。まだまだお宅募集中です。

### 選評

いろんな場所にお風呂を持って行っては自分で入り、ちょっとあり得ない場面をつくっています。でも、単にアイデアが奇抜というのではなく、細部がとても面白くて、じっくり見ていると、色々な発見がある作品です。たとえば、これらの写真の到るところに、絵画や写真、映画、そして映像にまつわる装置がさりげなく写し込まれています。具体的には、額に入った絵、プロジェクター、モニター、照明設備、映画のセット……そこには、イメージをめぐる人間の技術の歴史がぎゅっと圧縮され、日常の風景のなかで再構成されています。そこに、風呂に入って脱力した表情を見せる作者が、なぜだか居合わせている。歴史と日常と不可思議と作者が、一枚の画面の中で出会っている。見事です。



February 2000

大和 直之 やまと なおゆき

## 「Moments of the Cloud Catcher」

ブック/A4/68ページ

### 作者コメント

大空を眺めていると、雲たちの行きつく果てが何処なのか、虹のたもとに立つとき何がわかるのか、心の言葉で知りたいと、思わずにはいられない。

### 選評

一人の女性を21年間にわたって撮り続けているようです。その間に、その人は当然、齢を重ねて外見こそ変わっていく。そうなのだけれど、撮り続ける人と撮られる人の思いは変わらない。変わることと変わらないことからなる、矛盾した二つの出来事が、ここでは同時に進行しています。そうしているうちに二人の関係も、「撮る人」と「撮られる人」という受動と能動の関係ではなく、どこかで一体化してきたのでしょうか。ここには、写真という機械のメカニズムを超えた、暖かい抱擁と、それに負けないくらいの強さがあります。しかし全体には、それがエゴイスティックに押し出されることがまったくなく、いかにも自然です。こういう写真は、なかなかないと思います。





いくしゅん  
「物体だもん」

ブック/A4/90ページ/インクジェットプリント

作者コメント

とくに動物好きというわけでもなかった父親が、ある日突然ホームセンターでビッグミーマーモセットを買ってきたときの話です。

選評

あまり説明の必要はなくて、見てもらえばだいたい面白いと言ってもらえる作品。日常の面白い瞬間をうまく切り取ったという意味で、上質なスナップショットになっている。ただ、この人はすごく巧いこういう瞬間は誰にでも撮れるものじゃないけれど、すでにある種確立されたジャンルなんですね。レベルは変われど、今回の応募作品の中にも結構ある。その代表選手として選ばれました。



鈴木 淳 すずき あつし

「だれもいない、ということもない」

ブック/A3/24ページ/インクジェットプリント

作者コメント

顔のない街の写真。こんな世界を引き受けて、私達は日々生きている。「だれもいない、ということもない」という世界に。

選評

なかなかいい写真です。見知らぬ者同士が居合わせているだけの、普通の都市雑景。今は、肖像権が言われて、人の顔をスナップできなくなっているから、みんなが後ろを向いた瞬間を撮る、と。かつてスナップショットは、街が無意識の真実の顔を見せる瞬間を撮ることができた。これはその逆を実行することで、スナップショットが貧しくなっていることへのアンチテーゼになっている。



加納 俊輔 かのう しゅんすけ

「WARP TUNNEL」

プリント/420mmx594mm/12点/タイプCプリント

作者コメント

目の前にあるものが「何なのか」はわかるのに、何故か全く意味がわからないという状態を作りたいと考えています。

選評

ドキュメンタリーの方法を模倣しつつ、そこに膝かっくんをくわらせる。例えば、ある物が写真になることを通じて全く別の物へとスライドする。また、壁と壁の上のコードの両方にピン트가合っている。そんな風にピン트가合うのはあり得ないから、不思議な平板さが生じる、など。1枚の写真にたくさんの見方が組み込まれている感じがとてもデジタルで、それを最低限の操作でやっている。明確な表現だと思えます。



滝沢 広 たきざわ ひろし

「月の岩」

ブック/A3/52ページ/インクジェットプリント

作者コメント

写真という時間軸を利用して、記憶と歴史を物質化していくという事をテーマに取り組んでおります。内なるものと外なるモノのせめぎ合い。

選評

「岩」という、確たる存在の代名詞のようなものを撮影し、写真になったその岩を自由にアレンジする。つまり、岩の映像を操作して実物の岩のように撮るので、本当に岩を撮った写真も実は映像の写真に過ぎないんじゃないかと、こちらの感覚が危うくなる。人が写真を見るときに意識的無意識的に前提としているものを揺さぶり、違和感を覚えさせる方向へ作り込む。面白い、批評的な才能だと思います。



北川 陽稔 きたがわ あきよし  
「“annoski” #01~#05」

ブック/A3ノビ/32ページ

作者コメント

作者が存在せずとも作品としての写真が成立すること。私の想いは端的に言えばそれしかありません。

選評

幻想的で静かな感じが伝わってきます。ようやく環境問題が重要視される時代になったのでその意識が高く感じられて良いです。自然への愛情や、空気のきれいさが伝わってくる。マイナスイオンを感じられる気分になるし、癒されます。



中野 美登樹 なかの みとき  
「Ceremony」

ブック/大四切/13点/タイプCプリント

作者コメント

一度死んでしまったいのちを、もう一度再生させてみたい。レクイエムとともに、写真の中の世界で、新たな生命の息吹が生まれることを願って。

選評

写っている動物は剥製ですが、はじめは全然わからなかった。それほど、森の中で剥製たちがイキイキとしている。写真の持つ明るさやかわいらしさの中に、作家のやさしさがあふれている。リスの写真なんかは、純粹にかわいくて、思わず笑ってしまう。ポスターとして飾りたいくらいですね。剥製と捉えると悲しいですが、人間のエゴに対しての問題提起という面で良いと思います。



熊田 香南 くまだ かな  
「0.00034の子供」

ブック/A4/インクジェットプリント

作者コメント

「迷い子」に出会った。  
美しい海で、静かな路地裏で、にぎわった人ごみで。  
彼ら彼女らはカメラを向けた私を忘れるだろう。もういちどその視線をこちらに向ける確率などゼロにちかい。  
みんな何を沙汰していたんだろうか。

選評

この人は福島県の女性ですね。東日本大震災の前から作品は撮っていたようですが、「震災後、人間を撮りたくて仕方がなくなった」とあるので、生きていくことへの感謝の気持ちがより強くなったのかもしれない。人を撮るのがすごく上手くて、力強さや生命力を感じます。ただ残念な点もあって、所々、デジタル処理がされている。加工によって、余計なものを見せられている感じがします。写真がすごくいいだけにもったいない。



山縣 賢大 やまがた たかひろ  
「シティ、ネリマ、トーキョー」

ブック/四切/42点/Cプリント

作者コメント

大根、キャベツ、ブロッコリー、ネギ、とうもろこし、ブルーベリー。東京都練馬区の区切られた土地に育つ。今後、さらに良い作品にします。

選評

時代性も反映して農業の大切さみたいなものが、伝わってきます。社会問題を考えさせつつ、単純に自分の街を愛しているという思いも伝わってくる。被写体に愛情があって、見ていて楽しくなってきます。何か面白くて、かわいくて、楽しい。やはり見ていて楽しくなるような、プラスの感情を与えてくれる写真が選考の基準ですね。被写体への愛情は、はっきりと写真に写るものだと改めて感じました。



「あかるいほうへ」

1994年度(第9,10回公募)年間グランプリ

## 熊谷 聖司 インタビュー

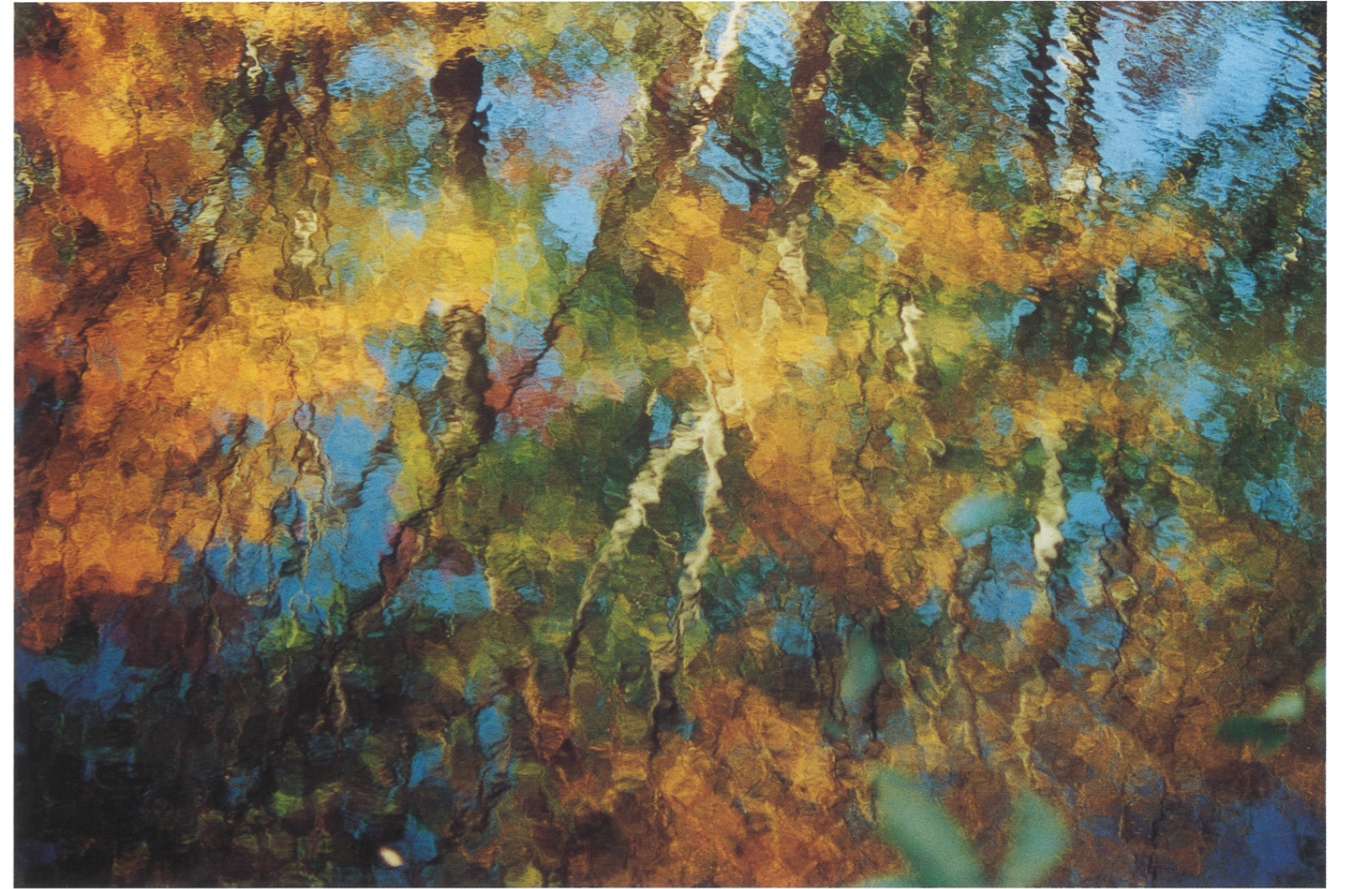
グランプリ受賞後、毎年のように個展を開いてきた熊谷聖司。最近、新境地を思わせる作品を精力的に写真集にまとめている。手応えを感じている、という近況を聞いた。

### 函館で撮った三部作

——「あかるいほうへ」、「とりのこえをきいた」、「神／うまれたときにみた」の最近出した3つの写真集についてお話をいただけますか。

撮影は、夏から冬にかけて函館市郊外の大沼公園で行っています。僕は函館市出身なのですが、夏に帰省したときに、20年ぶりぐらいに1人で大沼公園に行ったんです。小学校の遠足や家族旅行でよく行っていた場所で、子どもの頃の記憶がパッと蘇ってきた。それで体が勝手に動いて気付くととんとん撮っていた、というのが最初なんです。それが2008年で、その年の12月に個展を予定していたので、秋にもう一度撮りに行った写真を加えて「あかるいほうへ」のプリントを出すとともに、自費出版で写真集の形にまとめました。

——2冊目は、まるで印象派の絵のようです。「とりのこえをきいた」は、木々が反射して写っている湖面のシリーズです。最初はこれ



「とりのこえをきいた」

をまとめる予定はなかったんですが、絵みたいでこれで1冊できると思った。そこに実体がないところがある意味、写真っぽい。子どもの頃の記憶が撮影のベースにあるので、風景写真というより内面的なセルフポートレートみたいところもあります。

——「神／うまれたときにみた」は、今年発表した作品ですね

凍った湖面を撮った「神」は、常に揺れ動いていてある意味で動的。風と太陽の関係で写る木陰が弱くなったり強くなったりと、常に動いている。神というタイトルは、どこにもいる神様が現れる瞬間をイメージしました。日本には、どこにでも神様がいらっしゃるという感覚があるでしょう。そういう場所の一つとして大沼公園があるなど。

——「うまれたときにみた」のほうは。吹雪の中の湖と木を撮るイメージとタイトルは、秋の撮影の時点からありました。吹雪

は突然やってきて突然終わるんです。ゲリラ豪雨みたいなもので、近くは何も見えていないのに、少し離れたところは明るい。何も見えないけれど、何か見えているという感覚が、赤ちゃんとしてうまれたときみたいだなと思って浮かんだタイトルです。

——この3作は、自分の原点に返るといような要素があるんですね。

そうですね。その場合、一番分かりやすい方法は、自分が育った函館の街を撮ること。そういう方法もこれからやと思うんですが、何かもっと違う内面的なことをやりたいと思い、こういう形になりました。

——なぜ原点に取り組んだのですか。

2000年代、ずっともやもやしたものを抱えていました。世の中にある写真のほとんどは、何が写っていて何を伝えたいのか、という取り扱われ方をします。現在もそうですが自分はそのではない写真の可能性を見たい。それで、

1999年から7年ぐらいずっとアウトフォーカスの写真を撮っていたんです。ピントが合っていない写真上でボケているところにも、ピントは存在している。そういうことを考えていました。

——では、アウトフォーカスで模索していたものが、3作として結実したんですね。

ある意味この作品は、アウトフォーカスをやっていたからできた。ピントの選択肢は無限にあるわけだから、どこに持ってきてもいい。ピントが合わなくてもいいから、だいたい1か所で1枚ぐらいしかシャッターを切らないし、撮っていて自由になれたらそれでいいんじゃないかと楽になった。

——何が写っているか明確にするわけではないという意味でも、通常の風景写真と違うわけですね。

例えば、山岳写真で朝日を待つとか、酸素が足りない中、大型カメラで空撮するという感じじゃないんですね。もっと軽い。どんな



「神／うまれたときにみた」

風に見てもらってもいいんですよ。自分が考えていることと全く違うように解釈してくれることも、すごく面白いなと思います。

### パリで評価されて

——2008年以降、作品を写真集としてまとめるようになったのは、なぜですか。

前は、自分の中で写真集を何冊もまとめる意義が納得できなかった。出版社がどこも厳しい中で、写真集は出すのも売るのも難しいでしょう。憧れはあるけど、自分の身の丈には合っていないと。でも、1回こういう写真集を作ってみたら、すぐにできるし自分に合っている感じがした。それに世界中にいけると思ったんですよ。実際、フランスではけっこう売れているんです。

——写真集で、可能性が広がっているんですね。

この写真集を東京で買った人にPiY主催者の旦那さんがいて、本を見た主催者が気に

入って「PiYに参加しないか」と言ってくれました。また、その主催者は、東日本大震災で被災した日本のために、日本人の写真家4人の作品を使ったカレンダーを作って、売り上げは全部赤十字に寄付することを決めたんです。その中に、僕が今年撮った春の写真も選ばれました。僕は僕で、自費出版で桜の写真で写真集を作り、売り上げの一部は被災地に寄付する予定です。

——海外でチャンスが生まれた経緯を教えてください。

2009年11月に「THE TITLE PAGE」という写真集を出して、2010年から2011年に写真展をやった。その直後に東日本大震災が起こって、改めて「写真を撮って発表するという欲望」って何なんだろうと考えていたんですよ。いつどんな災害に遭うかわからないんだなと思ったら、とにかく自分がやれること、やりたいことをどんどんやろうと積極的になりました。

9月にPiYという自費出版写真集のイベント

でパリに行ったので、書店にも売りに行ったんです。すると、冊子の反応がいい。書店を回ると、「これは何冊あるの」「5冊あります」「5冊ちょうだい」と。向こうは本が買い取り制なんで話が早いです。11月に世界各地の書店が集まるOFF PRINTというイベントでまたパリに行くんですけど、そのときは鞆いっぱい持っていこうと思っています。

### 自分の色を発見した

——熊谷さんの作品は、写真新世紀でグランプリを撮った「もりとでじゃねいろ」からずっと、被写体と熊谷さんの間に膜があるような距離感があって、大沼の3作は、それがエッセンスとして抽出された印象があります。

写真は現実のように見えるけれど、現実ではないという意識が僕はすごく強いです。それはたぶん映画の影響から来ている。最初は映画を撮りたくて東京に来たんですよ。入った学校が日本工学院専門学校というんで



「spirits」

すが、ウィリアム・クラインの「ニューヨーク」を学校で見て、「すごかつこいいな」と思って写真に行ったんです。映画の場合、たとえドキュメンタリー作品でも、ある意味架空の世界。それが常に頭の中とか目の中にあるような気がしていました。3作は、プリントを作るときに意識的にそういう風に表現したところはあります。

——プリントはご自分でされるんですか。

カラーで暗室をやるようになったのは、2006年からです。それまではモノクロ作品が多かったというのもあるし、カラープリントは難しいと思っていたんですよ。佐内正史さんには佐内さんの色があるし、川内倫子さんには川内さんの色がある。自分のカラーが分からなかったんで、やっていなかった。でも、「THE TITLE PAGE」の作品を撮ってどんどん方向性を探っていったときに、高橋恭二さんの暗室を見せていただいて「あっ、何もしてないんだ」と納得した。で、その後、自分なりに引

き伸ばし機を調整していくうちに2009年ぐらゐに自分のカラーを見つけたんです。

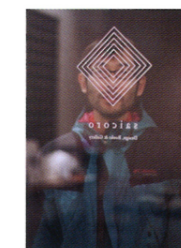
——現実そのものの色を再現した写真ではない。でも、木とか葉っぱの実在感がきちんとありますよね。つまり、デジタルで加工した人工的な印象の写真ではない。

そういう風にも見える。今はデジタルがあまりにもバーチャルになりすぎているから。僕が写真展をやると、若い人がずーっと見ていますね。「どうやってプリントしているんですか」と聞かれることも多いです。

——これから応募してくる人たちに、メッセージをいただけますか。

自分の好きなことに対してどれだけ真剣になれるか。そこしかないですね。自分を信じる。作品を信じる。写真が好きでずっと続けていったら、何かが出てくるでしょう。世の中は閉塞感があるけれど、そんなことを言っても仕方がないし、自分が時代を楽しくしてい

こうという人が増えれば、だんだんよくなっていくんじゃないかな。大沼の最初の『あかるいほうへ』のタイトルは、明るいほうへ歩いていくことが、自分にとっても周りにとっても大切なんじゃないかと思った、という意味も含んでいるんです。



熊谷 聖司 くまがいせいじ

### プロフィール

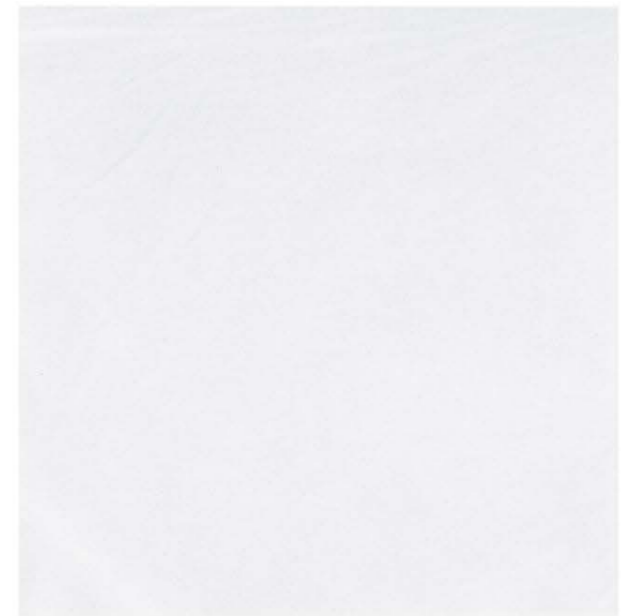
写真家 東京都在住  
1966年 北海道函館市生まれ  
1987年 日本工学院専門学校卒業  
1994年 第十回写真新世紀公募  
優秀賞(南條史生選)  
「第三回写真新世紀展」  
年間グランプリ受賞

個展に「もりとでじゃねいろ」「あかるいほうへ」「THE TITLE PAGE」  
[SPRING 2011]  
写真集に「THE TITLE PAGE」「神／うまれたときにみた」

Website: kumagaiseiji.com

2010年度(第33回公募)グランプリ

佐藤 華連  
「間、うつろう」



## 佐藤 華連 インタビュー

室内を撮った受賞作品「だっぴがら」とは、一転して明るイトーンの緑と白の色彩の対比が印象的な新作を持って現れた佐藤華連。どのような心境の変化があったのだろうか。



### 今ではなく過去を撮った受賞作

—受賞から1年の間に変化がありましたか。  
まず、写真だけをこの1年間やってみようと思いました。それから、写真新世紀のグランプリをとったことで、これからもやっていくという意識ができました。

### —受賞前はどんな感じだったんですか。

写真は好きでつくっていきかかったんですけど、早稲田大学芸術学校空間映像科を卒業して1年くらい写真を撮れませんでした。同期の高橋ひとみさんは写真新世紀の優秀賞を受賞し、写真関係の仕事に就く人もいます。みんなが成長していくのに、自分は何をしたらいかがか分からない。写真を辞めて働こうとも思ったんですが、就職活動もうまくいかない。じゃあ今の状態を写真にしようと思ってつくったのが「だっぴがら」です。

### —「だっぴがら」には虚無感が強く漂っている作品だという印象を受けました。

体は成長しているのに、できることは少ないし、やりたいこともないのは、何か大きく欠けているのではないかと。そういう自分に似たものとして、剥製や鏡、人が着ていない洋服を撮ろうというイメージは自然と目がいき、当時の頭の中の理想とする美しい世界、安らぎのカタチでした。剥製には命が欠けていて、鏡は実体が写るけれど本物ではない。だけど、それを撮るだけだと何か違う。もっと自分はいじわるだし、都合のいいように記憶をつくり変えていることもたくさんある。それが写真のコピーだったり、そのコピーをくしゃくしゃにしたり破いたりという行為につながっています。

写真は今を撮る行為だと思うんですけど、私は過去あった自分の、もう撮れないものをイメージで撮っていきたいという方向に無意識に向かっていた。「だっぴがら」ができて、「こういうことも写真でできるんだ」と気づいて、やりたいことがすごく増えました。

### 写真は単なる道具じゃない

—新作の展示構成についてお話しいただけますか。

これは「写真とは何か」ということを意識した構成です。今年になって初めて、そういうことを考えるようになったんです。それまでは、写真は自己表現の道具でしかなかった。でも、写真って、もっと広がりがあるのもっと自由な、単なる道具じゃなくてあらゆる方向へ向かう可能性がある。

### —この写真は人が寝た跡みたいですね。

そうです。起きたら、自分が夢をみた跡がシーツに残っていたという感じを撮りました。まばたきをして目を開けたときの、ふわっとした感じとか、薄暗くなってグレートーンのよな色がじわんと表れてくるような。寝て起きた時の感じをイメージでいこうと思ったのがモノクロのこの作品です。時間は止まっていないはずなのに、シーツには自分だけが止まってしまった瞬間みたいな跡が残っている。それが写真のように見えるときがありました。

### —植物を撮っている写真については。

こっちは真逆で、昼間、撮っている植物の緑も動いて自分も動いているときに撮りました。自分が子供の時に見ていた白昼夢や、今見ている妄想を表現しています。子供の時に、飛行機のつもりで原っぱを駆け上がってジャンプしている遊びをしていて、その時飛んでいるような気持ちになったのを、写真でやろうと思いました。写真は止まっているけれど、常にモノも自分も動いているという状態を写真の中に入れて、止まっているシーツの写真と対照的に見せます。思考のイメージと視覚のイメージは常に交じり合い微妙なバランスで成り立ち、常に揺れ動いているのに、ある方向性から一定に見ているようにも感じています。常識で見ることを簡単に決め付けているような。だから、自分自身が「見る」を改めて考え、色々実験と体感をしてつくりました。

—「だっぴがら」のときも感じたんですが、この作品もあまり日本のような印象がしないですね。ヨーロッパ的な風景というか。

去年の審査会でも「東欧っぽい」と言われました。私自身はヨーロッパに行ったこともなかったです。でも、今年の秋、リトアニアで開かれた「IN FOCUS」という国際写真フェスティバルの日本人作家のグループ展のメンバーに選ばれたんです。リトアニアに行って、「こういうことか」と思いました。複雑な社会の歴史が風化せず色濃く残っている町並、暗さで静けさが自分の作品をつくる際の根源になるものと少し雰囲気似ていると、見た目ではなく、感覚で感じました。

### —今は、どんな作品を作っているんですか。

やりたいテーマはたくさんあるんですけど、今は時間とその感覚をテーマにしたものをつくっています。写真は、フレームの中に一瞬の出来事を止めて見せているけれど、それはすごく異常なことじゃないですか。実際は全てが動いている中で、写真のイメージは止まっているという感覚は、当たり前だけれど面白いなと考えています。今回、「だっぴがら」より要素を削りましたけれど、もっとミニマムに、でもボリュームはもっとある感じで作りたいと思っています。



佐藤 華連 さとう かれん

### 「間、うつろう」

額装 / 1,200mm×1,200mm / 4点 / Cプリント  
額装 / 800mm×800mm / 4点 / アナログプリント(RC紙)

### プロフィール

1983年 神奈川県生まれ  
2009年 早稲田大学芸術学校空間映像科卒業  
2010年 写真新世紀東京展2010(東京)  
写真新世紀2010年度グランプリ  
2011年 写真新世紀大阪展2010(大阪)  
横浜フォトフェスティバル(横浜)  
発科展—早稲田大学芸術学校空間映像科閉科展(横浜)  
IN FOCUS2011(リトアニア ヴァリニユス)

# 審査員座談会

**HIROMIX** 時代の影響かもしれませんが、暗い作品や似ている作品が多かった。あと、人を撮っている写真が少なく感じました。もっと生命力や力強さのあるものを期待していたのですが。

**清水** 写真が似ているということに関して言えば、コンセプトだけでなく、表現まで似すぎていることに危機感を抱きました。たとえば日常のスナップ写真の場合、レベルの差はあるにせよ、構図やモチーフ、見せ方などが似ている。祖父や親を亡くして撮った写真なども、遺品を撮ったり、逆光があったり、本当に似ているんです。

**大森** コンテストに応募する理由が弱いという気がします。かけがえのない人が亡くなったから写真を撮った、それもひとつの理由ですが、それだけならわざわざ応募しなくてもいい。アルバムにまとめたり、ブログに掲載すればいい。写真新世紀に出すということは、強い思いや野心があるわけで、そういうエネルギーを感じさせて欲しかった。

**清水** 身内が亡くなったからって写真を撮るのは、もうやめた方がいい。それは尊い感情なんだろうけど、どの作品も同じだから、見る気がなくなる。

**佐内** ブックの中にはすごくいい写真もあるんだけど、肉付けの写真が良くない。選定が甘いというか、曖昧というか、あまり考えずに選んでいる気がする。ブックって、厚さを出さなきゃというのがあると思うんです。薄いと寂しいと感じるんでしょうね。でも本当は写真が先にくるはずなんです。自分の考えを引っ張ってくれる写真というのは、ブックの中に2~3枚しかない。それ以外の引っ張ってこない写真をどうするか。そこを上手くやらないとダサくなる。

## 写真表現における媒体の選び方

**権木** 写真ってどんどん情報的になっている。額に入っている写真を見ると、違和感があるんです。大きければ、大きいほど、何か違うなと。今回ブックタイプのもが多かったんですが、応募者の中にもそういう感覚があるのかもしれない。だけど、ブックが最適な形態かという点、それも疑問。そういう意味で、中途半端なものが多かった。旧来の写真から突き抜けるには、ブックじゃないものを考えられるかどうか、分かれ目になるかもしれません。写真であることにこだわらないことも、重要なんじゃないでしょうか。

**大森** Webの発展やデジタルデバイスの登場で、紙やき写真が前時代的なものになりつつあるけど、ソーシャルネットワークサービスってフォーマットが同じなんです。もし応募者がタブレットPCでデータを送ってくるようになったら、これほどつまらない審査はない。いつも思うんですけど、新しいメディアを使ったアートって、たいてい古くさかったりします。古いメディアを独特の使い方をする方が、もしかしたら未来につながるのかもしれない。表現の善しあしとメディアの新旧はそれほどリンクしないわけだし。

**清水** すでに写真ってメディアを問わないものになっている。「シャツやバス、皮膚にだってプリントできる。メディアを横断するような写真環境が、個人の表現と結びつくのは、もう少し先なのかな。あと「これ見たことあるな」という、他の作家を模倣しているような作品も気になった。

**権木** 無意識のうちにやっているところがあって、模倣していることすらわかってないんじゃないのかな。

7月某日、優秀賞選出審査会が行われました。佳作、優秀賞が決定したそのすぐ後で、今回の印象を審査員の皆様に率直に語っていただきました。

**清水** それは人の作品を見てないだけでなく、自分の写真もよく見ていない証拠。パッとイメージを消費することに慣れて、写真ときちんと向き合っていない。

## 今後、写真新世紀に挑戦する応募者への期待

**HIROMIX** 流行を追うんじゃなくて、「自分が流行を作り出すんだ」という気概が欲しいです。ブックも10年前と比べて、すごく豪華になっています。でも私たちが見たいのは何が写っているのか。パッケージにお金をかけるのもいいけど、それより写真のオリジナリティや創造力で変化をつけて欲しい。

**佐内** お金をかけるというのはどうなんだろう。手間をかけるならいいけど。

**HIROMIX** 私が応募した時はカラーコピーを使いました。器に頼っているというか、作品を表現するのにどういうメディアを選択するか、もう少し考えて欲しいですね。

**佐内** 応募メディアをブックだけにしちゃうとか。そうすればブックについても少し考えるのかもしれない。もしくはブックなしにしたら、相当すごくなりませんか。

**大森** 昔はメディアの数も少なかったから、バライタとRCペーパーなら、手間のかかるバライタの方が真面目にやっているというイメージがあった。善しあしは別にして。今はモチーフの選び方から仕上げ、表現方法まで何でもありですけど、この人写真好きのようになって、疑問に思う作品もあります。

**権木** まあ、好きなようにやればいいと思う。お金をかけたい人はかければいいし。器で選んでいる審査員はいないわけですから。

# 写真新世紀東京展2011を開催

2011年10月29日(土)から11月20日(日)まで、東京都写真美術館地下1階展示室において、「写真新世紀東京展2011」が開催された。2011年度(第34回公募)の応募者1,305名の中から選ばれた優秀賞受賞者5名および佳作受賞者20名の受賞作品の展示を行った。

優秀賞は、巨大なブックと同じように大判の出力をアクリルで額装した赤鹿麻耶氏の「風を食べる」、夢の中を映し出した表現を2枚ずつ並べた奥山由之氏の「Girl」、温もりのある木の額装で、作品を一点づつみせた木藤公紀氏の「百A」、

シンプルな2点の構成のバトリック・ツァイ氏の「God Only Knows」、3枚の写真を力強くみせた山田真梨子氏の「家族の肖像」、展示室の大きなスペースを各受賞者が使って表現した。一作品ずつ丹念に見入る来場者の姿が印象的であった。また、佳作受賞者20名による展示も盛況で、1つ1つの作品が趣向をこらしたものであった。さらに2010年度グランプリを受賞した佐藤華連氏による新作個展「間、うつろう」を同時に開催。「写真とは何か」と自問自答しながら作り上げたこの作品は、広いスペースをゆったり

と使った展示で、額装のアクリルに、来場者自身が写ることによって完成する作品として構成されていた。

去年より行われている受賞作品公開レビューでは、業界関係者やキュレーターの方など、一般の方々もそれぞれに興味のある作品の受賞者に直接作品の批評を行っており、また、アーティスト・トークでは、受賞者が一般の来場者の前で、プレゼンテーションし、自らの制作意図や想いを伝えた。年々と関心が集まる本展覧会。今回の開催期間中には、9,888人もの方が来場した。



グランプリ受賞 赤鹿麻耶「風を食べる」



2010年度グランプリ受賞者 佐藤華連 個展「間、うつろう」



写真新世紀東京展の会場風景



優秀賞 奥山由之「Girl」



優秀賞 木藤公紀「百A」



優秀賞 バトリック・ツァイ「God Only Knows」



優秀賞 山田真梨子「家族の肖像」



佳作作品の展示風景



# 写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的とした公募コンテスト。1991年に年4回の公募で始まった写真新世紀ですが、1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、34回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作品の展示や受賞者のトークショーを行う受賞作品展でも、多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

年次 回数	応募者数	グランプリ	優秀賞	審査員	
				レギュラー	ゲスト
1992年 第1~4回公募	483人	木下 伊織	岩崎昌弥 小川嘉朗 奥谷佳子 オノデラユキ 今義典 清水麻弥 辰本まこと 千葉鉄也 ノニータ(谷野浩行) 野村浩 山本美奈	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	
1993年 第5~8回公募	505人	市川 綾子	遠藤年勇 大橋仁 金城民子 河野安志 高橋ジュンコ 土井弘介 中山英輔 西光一 野村浩 宮本知保 茂木綾子	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	
1994年 第9、10回公募	703人	熊谷 聖司	大森 克己 小倉英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン=クロード・ペレグー リン・デルビエール	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ロバート・フランク(写真家) 坂田 栄一郎(写真家)
1995年 第11、12回公募	456人	HIROMIX	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 バトリシア・ガバス 本田 かな	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ジャン=クロード・ルマニー(フランス 国立図書館名誉コンセルバトゥール) 浅葉 克巳(アートディレクター)
1996年 第13、14回公募	587人	野口 里佳	加藤直司 菅野 純 黒瀬英文 蛸川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	伊島 薫(写真家) 椎名 誠(作家)
1997年 第15、16回公募	537人	矢島 慎一	伊藤 トオル ヴァレリー・ブラン 慶 高城典子 山本 香 山本 耕司	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	カシン・リー(写真家) 森山 大道(写真家)
1998年 第17、18回公募	771人	柏 亜矢子	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・ジリア 藤原 江理奈 守田 衣利	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	ベルナルド・フォコン(写真家) ホンマタカシ(写真家)
1999年 第19、20回公募	759人	安村 崇	伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邊 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	サラ・ムーン(写真家) 長野 重一(写真家)
2000年 第21、22回公募	944人	中村 ハルコ	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	横尾 忠則(画家) 倉石 伸乃(評論家) ジル・モラ(アートディレクター)
2001年 第23、24回公募	881人		今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西都 友典 吉岡 佐和子	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	木村 恒久(グラフィックデザイナー) 都築 響一(エディター)
2002年 第25回公募	1,004人	吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛冶谷 直記 SABA(高橋 宗正、中島 弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	マルク・リプー(写真家) 東松 照明(写真家)
2003年 第26回公募	1,150人	内原 恭彦	植本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウヘイ	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	マーティン・バー(写真家) 鈴木 理策(写真家)
2004年 第27回公募	1,087人	(準グランプリ) 川村 素代 滝口 浩史	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	ケビン・ウエステンバーグ(写真家) やなぎ みわ(美術作家)
2005年 第28回公募	1,324人	小澤 亜希子	新垣 尚香 梶岡 祿仙 とくた はじめ 西野 仕平 林口 哲也+松村 康平	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	ウィリアム・エグルストン(写真家) 蛸川 実花(写真家)
2006年 第29回公募	1,505人	高木 こずえ	喜多村 みか+渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	日比野 克彦(アーティスト) ボリス・ミハイロフ(写真家)
2007年 第30回公募	1,277人	(準グランプリ) 黒澤 めぐみ 詫間 のり子 中島 大輔	青山 裕企 田福 敏史 中里 伸也	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長) 森山 大道(写真家)	榎本 了彦(アートディレクター) 具 本昌(写真家)
2008年 第31回公募	1,517人	秦 雅則	岡部 東京 小山 航平 菅井 健也 保谷 綾乃 元木 みゆき	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	榎本 了彦(アートディレクター) 大森 克己(写真家) 野口 里佳(写真作家)
2009年 第32回公募	1,340人	クロダ ミサト	アダム・ホズマー 杉山 正直 高橋 ひとみ 安森 信	荒木 経惟(写真家) 飯沢 耕太郎(写真評論家) 南條 史生(森美術館館長)	榎本 了彦(アートディレクター) 蛸川 実花(写真家)
2010年 第33回公募	1,276人	佐藤 華蓮	齋藤 陽道 柴田 寿美 高木 考一 谷口 育美	大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家) 榎木 野衣(美術評論家) 清水 環(写真評論家) 蛸川 実花(写真家)	
2011年 第34回公募	1,305人	赤鹿 麻耶	奥山 由之 木藤 公紀 バトリック・ツァイ 山田 真梨子	大森 克己(写真家) 佐内 正史(写真家) 榎木 野衣(美術評論家) 清水 環(写真評論家) HIROMIX(写真家)	

# 写真新世紀

New Cosmos of Photography 2011 vol.26

写真新世紀誌第26号  
2012年3月1日発行

発行責任者: キヤノン株式会社  
 渉外本部 CSR推進部  
 写真新世紀事務局  
 〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2  
 Tel: 03-5482-3904  
 Fax: 03-5482-5131

【インタビュー・文】 鳥原学/阿古真理

【表紙の作品】 「風を食べる」赤鹿麻耶

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。  
 © 2012 Canon Inc. All right reserved  
 非売品





キヤノン株式会社

渉外本部CSR推進部 写真新世紀事務局

〒146-8501 東京都大田区下丸子 3-30-2  
Tel. 03-5482-3904 / Fax 03-5482-5131  
ホームページ [canon.jp/scsa](http://canon.jp/scsa)



本印刷物は、植物油インキを使用して印刷されています。

PUB. NCP04 0312SZ100 Printed in Japan